



「聖言うちひらくれば…」

熊本真愛教会

長尾 秀紀

「聖言^{みことば}うちひらくれば光をはなちて愚かなるものをさとしむ。」詩篇119:130(文語訳)

「牧羊者」の役目は、まず教会学校(CS)における「説教」の助けとなることです。CS教師は、「牧羊者」を用いて何をするのかと言うと、説教作りをするわけです。「牧羊者」本誌の「講解」、「研究資料」、「メッセージ例」は、実際のCS現場での「説教」のために用意されています。また、「ワーク」、「中高科へのヒント」、「フラッシュカード」、「子ども聖書日課」は、その日の「メッセージ例」から流れ出て書かれます。この10年間で整えられてきた今の形の「牧羊者」の各教材を、順番に並べてみると、その要の部分に「メッセージ例」があります。それが実際のCS現場での「説教」にとって、できるだけ使いやすいものとなるように努力が継続されています。

しかし、考えてみると「メッセージ例」とCS現場での「説教」には、大きな違いがあります。前者は書き言葉であり、後者は話し言葉です。さらに、提供する執筆者・説教者は大人ですが、受け取る聞き手は子どもです。…大人の感覚・言語能力vs子どもの感覚・言語能力…、この両者を、どのようにスムーズにつなげるか、橋渡しをするか、常に重要な課題です。

ですから、牧羊者の執筆者の先生方のために祈ってください。良いものが書けるようにさらに学び、チームで熟練していく必要があります。

同時に、現場のCS教師の兄弟、牧師も、より熟練を目指して共に苦勞しましょう。

今号は、教師養成講座に、日本ホーリネス教団 東京中央教会の錦織寛師の「説教…子どもの心をつかむお話」を取り上げました。これは兵庫教区CS教師研修会における講演の要約で、特に「子どものための説教心得10箇条」という内容です。説教準備の大きな助けになると思います。これに関連して、錦織師が書かれた「心に届けよう！ バイブルメッセージ…子ども説教のための7つのStep」(日本ホーリネス教団1050円)も良い参考書として紹介します。CS教師の学びに用いてはいかがでしょうか。

さて、二〇二〇年度カリキュラムについては、従来の3年サイクルではなく、1年で完結するカリキュラムとしました。CSで語るメッセージとして、聖書の最も重要な部分が網羅されるように努めました。これはCSの開拓伝道のため、また、CSの再スタートを計画している教会のために役立つと思います。内容がより良いものとなり、この一年物の「牧羊者」が、繰り返し使っていただけるような完成度になることが願いです。

最後に、「牧羊者」の本誌とワークなどが、実際にどのように使われ、どういう評価を得ているのか、今後、アンケートを取って把握し、共有したいと願っております。

今後とも、よろしく願います。

牧羊者

目次

巻頭言	1
教師養成講座 「説教…子どもの心をつかむお話」 錦織 寛	3
新生の希望 ≪1月教案≫	9
聖化の希望 ≪2月教案≫	24
再臨の希望 ≪3月教案≫	36
牧羊ひろば (幌向小羊教会)	48
おわりに	50

「説教…子どもの心をつかむお話」

—こどものための説教心得10箇条—

日本ホーリネス教団 東京中央教会 錦織 寛 にしこおり ひろし

イエス様が十字架につけられてから三日目の午後になりました。エルサレムからエマオに向かつて二人のお弟子さんが歩いていきます。二人で歩いているとどうしてもため息が出てきます。「あーあ、イエス様ってさ、ほんとに素敵だったよ。でも、終っちゃったんだよねー、イエス様が十字架にかかってあんなことになるなんて思わなかった」。

(中略)

そんな話を聞いているうちに、二人はだんだん、「あれ、そう言えばそうだな。聖書にはそう書いてある。こう書いてあるっていうことは、つまりイエス様はよみがえったってことになる、かもしれない。」なんだかね、ちよつと嬉しくなってきました。(中略)

皆さん、知ってください。イエス様はいつも私たちと一緒にいてくださる。今私たちはイエス様を目で見ることはできませんけれど、私たちに神様のお言葉を思い起こさせてくれる。私たちが神様のみ言葉を思い起こすと、心が燃えてくる。元気が出てくる。力がわいてくる。

皆さん。こんにちは、錦織です。今日は子どもの説教というお話したいと思います。今も「エマオの途上」のお話をしました。聖書の

み言葉が本当にそこで説き明かされていくときに、その聖書のみ言葉は、聞いた人たちの心の中に、命を与えていきます。

一箇所聖書を開きましょう。ヤコブ1章21節。「だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある」。

私たちが毎週子どもたちの前に立つて語ろうとしているのは、神様の言葉です。そして、神様の言葉は、子どもたちを救い、子どもたちを造り変えていく。私たちが召されているのは、そういうお仕事です。私たちが、説教させて頂くというのは、まさにそういうことなんです。

今日は、「こどものための説教心得10箇条」ということで、午前中お話をさせていただきたいと思っています。

1、話し上手は聞き上手

私たちがお話をする前に、私たちはまず、良い聞き手でありたいと思います。話すよりも聞く。口下手な人っていますよね。子どもの前に出ると、どうもなかなか上手に話せないっていう人がいますけど、ひとまずそれはそれでいいと思います。「話

すのは得意なんだけれど聞くのはぜんぜんダメ」っていう人よりは、「話すのはちょっと苦手なんだけれど聞くことならまかしといて」っていう人のほうが、見込みがありそうな気がします。

たとえば私たちが毎週出席している大人の礼拝で、神様の言葉をしっかりと聞くという訓練ができていないと、私たちは子どもの前に立つて、「先生が一生懸命話してんのに、お前たちは先生のお話を聞かないのか」なんて言えないわけですね。

良い聞き方とはということで、いくつかのポイントを挙げておきたいと思っています。

①恵まれやすいこと。とても大事なことです。説教者によつては、たとえば「今日の日曜学校の話ひどかったなあ」「みたいなことだつてあるかもしれない。でも本当に良い説教者っていうのは人の話をよく聞いて恵まれますよね」。

たとえば、聖会に行つて説教者がちよつと慣れない説教者で、「今日の説教は何が言いたいんだかよくわからなかったなあ」「みたいなことがあつたときに、神様に用いられている説教者の先生が最後にまとめのお祈りをするところがあるんですね。ところが、ほんとに神様に用いられている器たちっていうのは、そのメッセージがどういうメッセージであつたとしても、きちんとその中から、「あー神様の恵みはこれだったなあ」つてことをつかんで、的確なお祈りをなしますよね。

②語り手の目を良く見ること。礼拝の説教でも、牧師先生の目を見てください。目を見ながら話を聞くと、「あつ、この人たちはみんな聞いてくれてる」つてことがわかります。説教つていうのも

コミュニケーションがそこで生まれているんです。
③ **うなずきながら聞くこと。**うなずいてください、時々ね。説教者の牧師先生たち、そうですね。会衆の人たちがこうやってうなずきながら聞いてくださると、「あつ、良かったと力がわいてきます。」
④ **自分のこととして聞く。**説教でも何でもすぐに「あの人に聞かせたかった」っていう人いますよね。「今日の説教良かったのに、あの人がいないなあ」みたいな。やっぱり説教つてのは基本的に自分に語られる神様の言葉として受け止めるのがとても大事なことです。

教会で私たちが子どもたちに話すときもそうなんです。「おまえに伝えてやるよ。聞け！聞け！」っていうんじゃないで、「まず私がそのみ言葉に聞いて教えられて子どもたちの前に立つ」というのは、とっても大事なことです。

⑤ **心に留めて何度も思い出すこと。**礼拝の説教でもそうなんですけど、本当に恵まれて「アーメン、良かったあ、今日は」と言って、献金をする頃になると、大体その日の説教を忘れてるっていうことはないですか。教会の扉を出たとたんに、この世の生活モードに戻っていったら、その日の礼拝の説教をすっかり忘れる。「いや私の頭はざる頭でして」って……。私たちが心に留めて何度も思い出すっていうこと、大事なことです。

⑥ **神に従う決断をすること。**大事なことは、私たちが神様のお言葉を聞いて従うことです。聞いて、受け止めて、そして従う。神様が迫っておられる事柄に従っていくということです。ヤコブも言ってますね。「聞いたまま聞いただけで終わりにした

ら、何にもならないよ」って。神様に従う決断をする、そういう私たちのみ言葉の前にある姿勢というものが、今度は子どもたちの前に立つ私たちを決めていきます。そういう意味でも、私たちはまず良い聞き手でありたいと思います。

2、神に遣わされた人は神の言葉を語る

ヨハネ3章34節、「神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである」とあります。神に遣わされた人は神の言葉を語る。

じゃあ聞きます。あなたは神に遣わされた人ですか？「神様が私を立てて、私を召していただくさるんだ」ということを受け止めるっていうのは、とても大事なことでと思います。「神様から遣わされて子どもたちの前に立っている」。自分の趣味でとか、自分の思いだけでここに立っているんではなくて、「神様が私を選んで、今日もこの言葉を語らせようとしておられるんだ」っていうことを、私たちは覚えたいと思います。

私は神様から遣わされた。だったら神の言葉を語るんだ。神の言葉を語るっていうことは、自慢話とか自分の話ばかりしていちやダメですね。自分の証しをするときには、ほんとに気をつけてください。神様の恵みを証しているつもりで、そのうちだんだん自慢話っぽく聞こえてくることってあります。「あー大変だったんですね、ご苦労様」って皆が言っておしまいっていうようなね。

それじゃあ神の言葉って何でしょうか。それは神の口から出たものです。「人はパンだけで生きる

ものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きる」って言うじゃないですか。ということは、聞いた人が信仰持つて受け止めれば、その人は変わっていくし、その人が命を得ていく、その人が救われていく。皆さんね、聖書の言葉って、すごいんですよ！すごい！神の言葉なんだから。

たとえばイエス様が中風の男になんておっしゃったか覚えてます？「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」っておっしゃった。イエス様の言葉っていうのは、むしろでしょ。病気で寝てる人に、「起きよ上がって床を取り上げて家に帰れ」っていうのは、すごい残酷な話だと思いませんか。せいぜい「布団は君たち持ってあげてね」って言うところでしょう。でも「床を取り上げて家に帰れ」って。そしたらそのとおりのことが起こっちゃったじゃないですか。

「光あれ」とおっしゃったら、光があるし、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」っておっしゃったら、そのとおりのことが起こる。その人が本当に信仰持つて受け止めるならば、その人が変えられていく。私たちが預けられている神様の言葉っていうのはまさにそういうものなのです。

み言葉っていうのは、甘いし慕わしい。「純金よりも慕わしく、蜂蜜よりも甘い」って言いますよね。皆さん、確信持つて立つてください。甘いし慕わしいこのみ言葉を、私たちは手渡していく。ただ同時に神様のみ言葉っていうのは、厳しいところがあります。

例えば皆さん、許せない人っていませんか？神様が「もしお互いに責むべきところがあれば許しあ

いなさい」とおっしゃった。それをまともに聞いたら許さなきゃいけないんですよ。しんどいでしょ、許せないのに。

変えたくない時だってあるんですよ。「わたしの生き方に触らないで」って。「もうこのまま私は行きたいんだから、神様がなんて言おうが、私は私なんて…。それを神様に、「変われ」って言われると、「いやだ」。「変われ」、「いやだ」。「いやだ、いやだ」って、神様とやらなくてもいい格闘しちゃう時もあるわけですが、最後は「神様、わかりました」って、大体降参して終わるんです。皆さん、ある意味では自分が見えてきますから、厳しいところはあります。そういう神様のみ言葉を、子どもたちの前に語るんです。

3、まず自分がみことばに驚く

「恵まれやすい人になる」

三番目のポイントとして、まず自分がみ言葉に聞くということがとても大事になってきます。

①聖書の言葉を恵みとして聞く。「律法ではなく恵みとして」ということなんです。

さっきの話ですが、中風の男の人に、「あなたの床を取り上げて家に帰れ」という言葉を、律法として聞くとどうなるかっていうと、「おまえはな、何年間そこで寝てるんだ、おまえが甘ったれだからそうやって動けないんだ」「こめんなさい、イエス様。今まで私は怠けてました。これからは一生懸命、歯を食いしばってガンバリマス！」と言って、布団を取り上げて家に引きずるようにして帰っていきまして…。これ、律法的な聞き方ですね。

でも恵みとして聞くっていうのは、そうじゃないでしょ。そのことを神様がしてくださるってことじゃないですか。

「いつも喜んでいなさい」ってみ言葉があるでしょ。私たち喜べない時ってあるわけじゃないですか。喜べない私に、いつも喜んでいなさいって言われる。「いつも」がなければまだいいんだけど、「いつも」って言われちゃうから困るわけですよ。ね。「こういう時もですか、こういう時もですか」って考えていくと、「無理」って思うわけですよ。私たちが無理な時があること、神様は知っておられますよ。悲しい時、苦しい時、辛い時、いろんなことがありますから、「ああここで喜ぶのは難しいな」って時ありますよね。

ところが、「恵みの言葉として聞く」というのは、「私たちは喜べない」というような状況があるんだけれど、神様のみ言葉が私たちのうちに働くときに、喜べないはずの私が喜べないような状況の中で喜べるようになっていく。

教会学校の場合に、よく最後に教訓で終る人っているんです。「だから皆さん、こういう風にがんばりましょう」、「だから皆さん、聖書を毎週読まないといけませんよ」って、それはそうなんだけど、それで終わらないようにしたいですね。「聖書はね、神様の言葉だからだよ。神様の言葉ってこんなに素晴らしいんだよ」、「そうかあ、神様の言葉ってそんなに素晴らしいのか」って、それを伝えたい。神様がどんなに恵みに富んでおられるか、神様がどんなに力に満ちておられるかっていうのを伝えたいんです。

②聖書を読む。私たちがメッセーjの準備をするときに一番大事なことは、やっぱり聖書を読むことです。まず聖書を読んでください。何度も何度も聖書を読む。土曜日の夜に初めて聖書を読むっていうんじゃないくて、少し早目に聖書を読み始めてください。できればいろいろの訳で。

まずは参考書や教案を見ないで、聖書そのものを読んでください。もちろん「今日の聖書の箇所はどこかな」ってのは見ないといけないんですが、でも、まず参考書や注解書や教案を見る前に、聖書そのものを是非何度も読んでほしい。

③中心的なメッセーjをつかむ。何度も読む中で大事なことは何かっていうと、中心的なメッセーjは何かをつかむってことです。「このテキストの中で中心的なメッセーjって何だろうか」。そこをはずさないことがとても大事なことです。その週の中心的なメッセーjって何だろうか。分からなくなるまで読む。「分かった」って思っているうちはダメです。分からなくなるまで読んで下さい。

『牧羊者』5月24日の教案のところ。使徒行伝1章12〜14節。（聖書箇所朗読）。

たとえば最初からいきますと、「オリブ山ってどこだ」、「安息日に許されている距離って何のこと?」、「その泊まつていた屋上の間?」、「イエス様の家族はいつから弟子たちと一緒にいたのかな」、「心を合わせて、ひたすら祈りをしていた」、「どんなお祈りをしたんだろう。一斉祈禱だろうか、いくつかのグループに分かれてお祈りしたんだろうか。分からないこといっぱい出てくると思うんです。

分らないことがいっぱい出たあとで、教案誌や注解書やそういうものを見ると、「あ、そうなのか」って納得できる時もある。『まだわかんない』って時もありますよ。まだ分かんない時には、教会の先生のところにいって、「先生、これはどういうことでしょうか」って聞くといいですよ。

とにかく分なくなるまで、是非読み込んでほしいんです。

④恵みとして読む。

例えばさっきの「待望の祈り」のところでも、「心を合わせてひたすら祈りをしていた」というところがおそらく中心聖句になるでしょう。「心を合わせてひたすら祈りをしていた。だから皆さん心を合わせてひたすら祈りましょう」っていう、それだけで終りたくないんですね。だって教会学校の子どもたちって、お祈りが苦手な子どもたち多くないですか。子どもたちでなくても、大人でもあると思います。ですから言葉を恵みとして読む。「そうだ、本当に私たちは心を合わせて祈ることができるんだ」と。だって弟子たち、お祈りできない人たちだったんですよ。お祈りするとすぐ眠くなるっていうね。ところが、その弟子たちが、十日間お祈りした。イエス様の言いつけだから、仕方なく我慢して集まってたんだろ。そうじゃなかったでしょうね。聖霊が降るまで、楽しみにしてそのことを待ち望んで信じて祈ってた、祈っているうちにどんどんその祈りが一つになっていく、そういうことがあったんでしょう。

恵みとして受け止めるっていうのは、聖書読むときにとても大事なことです。

4、子どもは神様の宝

子どもを大切に、分かることばで話す

「子どもは神様の宝」ということです。み言葉を語るときに私たちが語る相手は、子どもたちであることが多いと思います。是非子どもを大事にしてほしいと思います。

子どもに分かる言葉を是非使ってください。分らない言葉は、言い直してあげたら良いことですから、是非分かる言葉を使ってください。

私は、小学校3年生の時にイエス様を信じたんです。「本当はもっと早くイエス様を信じてたらもっと幸せだったろう」って思うんです。誰か導いてくれたら、信じられたと思います。でも1、2年生のとき、誰も導いてくれなかったんです。

教会学校でこういうお話を聴くかかっていうと、再臨の話をよく聞いたんですよ。「イエス様がもう一度来られる時に、イエス様を信じている人は天国に行けます。イエス様をまだ信じていない人は、地獄に行きます。皆さんイエス様を信じましょう」って、日曜学校の先生たちがお話するわけ。

私にとつて何が問題だったかって言うと、「信じる」という言葉が分からなかったんです。「私は、信じる」ってことがどういうことか分からないので「私は地獄だな」って思いました。分からないんですもん。少なくとも「信じた」って経験はないですから、「私は地獄かな」って。

私は寝る前に毎晩お祈りしました。イエス様今晚来ちゃダメです。できるだけ後に来てください。苦しい苦しいお祈りをしました。九九九兆九九

九億九千九百九十九年あとに来てください。毎晩そうやってお祈りをし終わると、平安のうちに守られて寝ていました。

小学校3年生のときにキャンプに行つて、そこでひとりの先生が「イエス様を信じるっていうのはね、あなたの罪をお詫びして、イエス様を救い主としてお願いすることなんだよ」ってことを教えてもらったときに、私はイエス様の前に罪をお詫びしてイエス様を信じることができました。

私、小学校3年生のときに信じましたから、その日を境に私はガラッと変わったとかいうわけではない。ただ一つ変わったのは、九九九兆九百九十九のお祈りをしなくなった。「今日イエス様がこられても大丈夫だから」っていうことで、本当にそれは私にとつて大きな変化だった。

教会っていうのは難しい言葉がいっぱいあります。「聖霊降臨」、「贖い」、いろんな分からない言葉がいっぱいある中で、子どもに分かる言葉を使ってください。

5、ポイントをしぼる

伏線（しかけ）をおいて話す

お話をするとき、確かに私たちは聖書のストーリーをお話することが多いと思います。だとすると、「そこで一体神様は何を語ろうとしておられるんだろうか」というその中心ポイントをしっかり絞るということが大事なことでと思います。中心ポイントはできれば、ずらさないこと。

そして子どもの説教の場合には、中心ポイントを一つに絞り込むことをお勧めします。大人の説

教では「先生はだいたい3ポイントでお話なさる」とかありますが、子どもの場合には3ポイントは多すぎるかなって思います。「一つのことだけ、このことだけ覚えてくれたらいいからね」っていう、そのことを子どもたちが受け止めてくれたら十分かなって思います。

中心ポイントは繰り返し返すってこと、大事なことです。中心ポイントは何回も言う。最初のところでお話し、真ん中へんでお話し、最後のほうで2回くらい繰り返し返すっていうようなことは大事なことでしょね。

中心ポイントを絞り込んでいくということの中でも一つ大事なことは、**伏線をちりばめる**ことです。どういふことかっといういますと、ちよつとした仕掛けなんです。たとえば、さっきのエマオの途上のお話で、中心ポイントを「よみがえったイエス様はいつでも私たちと一緒にいてくれる」ということを中心的なテーマにするとしたら、お弟子さんの会話の中に、例えば「イエス様はいつもそれまで一緒にいてくれたけど、イエス様死んでしまってもう一緒にいてくれないね」という弟子たちのつぶやきを、さりげなく入れておくわけです。それが実はそうじゃなくて、イエス様はよみがえって今も一緒にいてくれるんだっていうところを際立たせていくわけですね。これが伏線っていうことです。**中心聖句を繰り返し返すのも良いということ**です。それは、み言葉が心に残るからということですね。いい説教は、み言葉が心に残ります。

私の団体でラジオやテレビの牧師も務めておられる村上宣道という牧師がいます。あの先生の説

教の一つの特色は、最後にみ言葉が残るっていうことです。それは先生がいろんな例話も使いながら、ただみ言葉をその説教の中で何回も繰り返し返していく。いつもみ言葉に帰る、ということのなかで、最終的にその中心的なみ言葉からずれない。そして、そのみ言葉を最後まで繰り返し返していくことで、それが心に残っていきます。

6、子どもに「慰めの福音」を届ける 「牧会的子ども説教をする」

皆さん、「今日はこれを話してやるぞ」って思うわけです。そこで覚えないことは何かというと、「あなたは目の前にいる子どもたちを知っているか」っていうことなんです。

たとえば「神様は愛です」というメッセージを語りたいと、そのように準備をします。ところが、「神様は愛です」というメッセージを語ろうとするときに、その聞き手の子どもたちが色々な問題を抱えている、色々な重荷を抱えているということが分かってきます。

たとえば、うちの教会は非常に新宿に近いところにあるもんですから、色々癖のある子どもたちが来ます。「お母さんが、小学校2年生のときに病気で亡くなりましたとか、「親が離婚してます」、「お母さんは家を出てしまつて、時々お金がなくなると家に帰ってきて、子どもの貯金箱からお金を抜いてまたいなくなっていくます」っていう、そういう子どもたちが来てる。そうしたときに、その子どもたちに「神様は愛です」ということを、み言葉にあるんだから語るんです。語るんだけれ

ども、「平気な顔して語れますか」っていうことなんです。悩んでほしいんです。

「神様、あなたは『神様は愛だ』って語れつておつしやいます、けど今、私が語ろうとしているこのみ言葉を聴く子どもたちの中には、こういう子どもたち、ああいう子どもたちがいます。その子どもたちにどうしてこのみ言葉を手渡すことができますか」っていう、神様とのやりとりをしてほしいんです。祈りの準備です。そうやって、もう一度そのみ言葉を聴き直してほしいんです。み言葉を語る苦しみ、語れないっていう苦しみは、是非、教会学校の先生たちが経験してほしい。

皆さん、そういう意味では神様の前に正直であつていいと思います。「こんなの信じられないよ」って、言つていいと思います、ひとまずはね。前日になつてそれやらないでください。前日に悩むととても苦しいですから。早めにやつといてください。週の初めぐらいにね。

というのも聞き手はやつぱり、そういう風に聞いてますよ。聞き手は「ホント？」って。そういつた時に、そういう問いをみ言葉に投げかけながら、私たちが聖書とやり取りしていく。

例えば、水の上を歩くっていう話、私たちが「エー、そんなことってあるの」って思いながら、準備していくとします。そして土曜日ぐらいになつて、「そうだ、確かに神様は今もそういうお方だ、ホントだ、アーメン」て、本当に折つて子どもたちの前に立つということ、それは嬉しいことです。まず私が、神様の前に出てそのみ言葉を聴くというところからです。

7、祈りつつ原稿を書こう

～出たとこ勝負じゃ駄目～

CSのお話をする人は、是非原稿を書いてください。完全原稿をお勧めします。一言一句、全部しゃべるように、あなたの語り口調でそのまま書いてください。そのとおりに話せなくてもいいです。すから、ひとまず準備してください。

何でそれがいいかっていいますとね、完全原稿書いて、声を出して読み直すと、子どもに分らない言葉って気づくんですよ。もう一つは、話の流れに無理はないか。気をつけないと私たちウソ言っちゃうんです。ちゃんと準備ができてないと。

8、練習！練習！また練習！

～本番では原稿は見ない！～

前もって練習してください。説教の技術についていうことでは、たとえば、スピード、声の大きさ、ジェスチャーというのは大事なことです。はつきりと話すということ、声の大きさも、もによもによもによって言わない。話の盛り上がるころでは、声が大きくなるスピードが少し速くなるということがあります。ジェスチャーも、有効に使った方がいいと思います。ジェスチャーなんかは、皆さんが自分の説教をビデオにとって、後で見たりすると一番いいんですけれど。

問。べらべらべらつとしゃべらないで、やつぱり間を大事にしたいと思います。ちよつと先生がだまる。すると、みんながぱつとこつちを向きます。スピードということも関係しているん

ですが、たとえばお話のときに、最初ゆつくり静かに始まって、だんだん盛り上がっていった、静かに終るとか、そういうことってありますね。

会話。会話をいっぱい入れるというのは、話リズムができます。創作も入ってきてしまいますが、会話っていうのも子どもにお話するときにはとても大きな助けになります。

視線。基本的には子どもの目を見て話をしてください。

本番では原稿を見ない。教案開いてお話しする人いますけど、たまに。やめましょう。あれは、あんちよこですから。まずいですよね。やつぱり本番のときは多少原稿と違ってでもいいですから、どうぞ自由に話してください。

9、神様にゆだねて

～風は思いのままに吹く～

説教っていうのは、どこでどう恵まれるかわからないんです。

私、小学校のときイエス様を信じて、そして小学校の高学年から中学校にかけてすごく神経質になりました。神様に罪をお詫びしないと天国にいけないよ、誰かに迷惑をかけたらその人に謝らないといけないよっていうふうに教えられました。そんな中で、私はすごく神経質になりました。

最後どうなったかって言うと、つばが飛ぶのがすごく心配になったんです。つばって透明ですから、「飛んだような、飛んでないような」いう時があります。それでも謝らないとおれないんです。だって心配なんです、地獄に行ったら大変だから。

中一の後半ぐらいが一番ひどかった。私の両親は私を心配して、この子は精神的な病気かもしれない、一回相談にいかなきゃって思ってたぐらい。

私が中1から中2に上がるときに、私はスプリングキャンプに出ました。そこでひとりの先生が、クリスチャン生活どうあるべきかというお話を中高生にむかつてくれた。お話をして本当に熱が入ったときに、先生の口から大きなつばがポトンと落ちた。私はね、先生をじつと見ていました。先生の口からつばが落ちた。「謝らないと地獄だよ」ところがその先生は謝らなかった。その時、私分かったんです、「あつ、つばが飛んでも天国にいける」。私はその時から変わったんですよ。

一人の人が変わっていくって、その説教の中で神様が働かれるって、どう働かれるかわからない。それは、ほんとうに今日の説教が支離滅裂だったとか、おかしくなっちゃったとか、途中で詰まっちゃったとか、いろんなことあるかもしれない。うまい下手っていうのもあるかもしれないけど、うまいとか下手ではなくて、そこに聖霊が働かれるときに、神様は必ずそこで神様のみわざを起してくださる。だから心配しないで、お話をしたら後のことは神様にゆだねる。子どもたちの心の中に、どんな形でかわからないけれど語りかけてくださる神様の働きかけにゆだねていく。

10、説教は10分だけど、説教は一生

説教は10分だけど説教は一生です。あなたが自分の語った説教に生きることです。お祈りしましょう。
(二〇〇九年四月二九日「兵庫教区CS教師研修会にて」)

聖書 ヨハネ3・1～15 テーマ 新しく生まれる

序論

(大頭)

人が救われるとき、義認と同時に新生の恵みが与えられる。義認は神の前に裸で立つ罪人を、神がおおつてくださるいわば外側の恵みであるのに対し、新生は人が刷新される内側の恵みということが出来る。

人目をはばかって夜、主イエスを訪ねたニコデモは、①神の選民ユダヤ人、②宗教的指導者であるパリサイ人、③ユダヤ最高会議サンヘドリンのメンバー、④人生経験豊かな人、⑤博学で尊敬されていた教師、⑥主イエスに好意をもっていた人、⑦謙遜な求道者であった(唐木照雄著「信ずべき福音」より)。人の目には、神の国(ヨハネはこの「神の国」という語をほとんど「永遠の命」と同じ意味に用いる)に最も近いと思えるニコデモが、新生の恵みを理解することができなかったことは、この新しいのちの不思議さを物語っている。

一、新しいのちの新しいさ

新しいのちの新しいさがどれほどのものか、ヨハネは第一の手紙に「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」(3・9)と記す。新しく生まれた人は、本来罪を犯さない。私たちが罪を犯すのは、いのちが不十分だからではない。問題は私たちがこのいのちの新しいさを十分に知らず、このいのちを十分に生きていないことにある。罪を犯さないためには、神から生まれた者がキリストにとどま

ること(1ヨハネ6・6)が必要である。キリストにとどまるために、神に取り扱われ、そのようにできない自分を神に差し出すことが求められる。けれども、新しいのちそのものは十分である。新しく生まれることがそれほどの恵みであることに、まずは目を見はらう。

二、神のいのち

〈新しく生まれる〉という言葉は「上から生まれる」とも訳すことができる。救いにあずかる者は、上から、すなわち神から生まれた人である。パウロは、エペソ書で新しいのちを「神のいのち」と呼ぶ(4・18)。私たちは、義認によって戸籍上の神の子とされると言える。けれども、それにとどまらず、神は私たちをご自身のいのちにあずからせなければ、ご満足なされない。神は私たちを、血を分けた子のように、ご自分に似た者となさりたいのである。

罪を犯さない聖さは、神のご性質である。私たちはどんなに心を入れ替えたところで、また努力したところで、自らを聖くすることはできない。神のいのちを分け与えていただくという恵みによって、初めて聖化が始まる。

また、神のもう一つのご性質は、永遠である。新生のいのちが永遠のいのち(15節であるのも、それが神のいのちだからである。私たちは神のいのちによって、神の永遠を分け与えられているのである。

三、キリストの十字架

そして私たちが、新しい、神のいのちにあずかることができるのは、キリストの十字架による。

荒野で「すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた」(民数記21・9)。主イエスは、この記事を引いて「人の子もまた上げられなければならない」とおっしゃり、ご自身を献げてくださった。子どもたちもまた罪の中に死んでいる。「仰ぎ見て生きなさい」と大胆に導こう。

結論

〈どうして、そんなことがあり得ましようか〉というニコデモの反応はまったく自然であった。けれども、彼もまた超自然の新生を体験した。〈風は思いのままに吹く〉。私たちには不思議に思えるいのちを、神の御霊は与えることが出来る。どんなに困難に思える環境にも、魂にも、御霊は届くことができる。そして風が吹けばその音を聞くように、神のみわざは確かなものである。

日常の記憶がおぼつかなくなった最長老の姉妹をお訪ねした。牧師の名前はご記憶ではない。けれども聖餐を差し出すや、さっと居住まいを正され、十字架を感謝して祈る姿に姉妹に宿るいのちの確かさを見た。キリスト信仰は、教理への納得だけではなく、感情的高揚だけでもない。ましてや御利益目当ての保険ではない。クリスチャンとは、老いも病も弱さも決して奪い取ることができない、新しいのちに実際にあずかった者である。ウエスレーはこのいのちにあずかるために、積極的に待ち望むように教えた。神の恵みが、いつどのように与えられるかは私たちにはわからない。だからこそ集会に励み、聖書を調べ、祈りつつその風を待つのである。

研究資料

(中島)

テキスト

- 1 **パリサイ人** 彼らは律法の行いに熱心なあまり、本来の律法の精神を見失う傾向があった。**ニコデモ** 後にイエスを同僚らの前で弁護し(7・50)、イエスの埋葬を手伝うまでになる(19・39)。**ユダヤ人の指導者** 最高会議の議員を指す。
- 2 **夜** 人目を避けるため、あるいはイエスとゆつくり話すためであったかもしれない。だが彼が世の光であるイエスのもとに光を求めてやって来た、という象徴的な意味の方がより重要であろう。
- 3 **イエスは答えて言われた** イエスは問われる前からニコデモの心を知っておられた(2・25)。**よくよく** ヘブル語の「アーメン、アーメン」。イエスが極めて重要なことを述べる際、前置きとしてよく用いた(5、11)。**新しく** ギリシャ語アノーセンには「新しく、初めから」と「上から」の二つの意味がある。イエスは両方の意味を込め「上からの力によって、まったく新しく」と語られたが、ニコデモは前者のみの意味で(しかも字義的に)理解した。**神の国** ヨハネ福音書ではここだけ(ただし18・36に「わたしの国」とある)。「永遠の命」(15)を持つことと「神の国」に入ることとは、ほぼ同じ意味と理解してよいだろう。
- 4 **もう一度、母の胎にはいつて…** ニコデモは、本気でこう答えたのではないだろう。あるいは、ブライドを傷つけられたことに対する抗議を込めた返答かも知れない。なぜなら「新しく生れる」とは、異邦人がユダヤ教に改宗(回心)するとき

に用いる表現だからである。イエスが「新しく生れなければ」と語ったときに、ニコデモはイエスが回心について語っているのだと、素直に受け止めるべきであった。それができなかったことは、彼の中に「ユダヤ人である自分もまた、異邦人同様に、今までの生き方を捨てて回心せねばならない」という発想がまったく欠けていたことを示す。

5 **水と霊とから** ニコデモが「新しく」を「上から」と正しく理解できなかったのを見て、イエスはこう言い換えた。なお前述の異邦人の改宗では、汚れを取り除くために水のバプテスマが行われた。あるいは洗礼者ヨハネによる「悔改めのバプテスマ」(マルコ1・4)もあった。よってイエスが水に言及されたときに、今度こそニコデモは、回心をうながされているのだと受け止めるべきであった。なおこの部分について、「水ならびに霊」という解釈と、「水すなわち霊」という解釈に分かれるが、結論のみ言うと、いずれも「霊」に力点が置かれているという点において、両者に大きな違いはないと考えて差し支えないだろう。

6 **肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である** 「肉から生れる者」は生まれながらの人であるのに対し、「霊から生れる者」とは、神の影響力に対して心開いた者を指す。そのような人の全ての力は、聖霊の支配のもとに置かれる。

8 **風は思いのままに吹く…** ギリシャ語プネウマは「風」「霊」の両方の意味を持つ(ヘブル語ルアハも同様)。風の起点と到達点を人は見届けることができないように、神ご自身について人が知りうることも限られている。しかし驚くべきこと

神の霊によって生まれる者は、神の永遠の性質にあずかることができるというのである。

12 **天上のこと** ここまでイエスは、新生の必要性と、その新生が神のわざであるということについて語ってきた。それでは神はどうやってそれを実現されるのだろうか。それがここで言う「天上のこと」であろう。まさにそのことについてイエスは「荒野のへび」を例に挙げて説明する。

13 15 **天から下ってきた者…のほかに、だれも天に上った者はない** 誰も自分の力で天の頂に登ることはできない。その点でパリサイ派の律法に代表される人間のわざは全く否定される。しかしそれでは誰が救われるのだろうか。それに対する神の答えが、神の御子ご自身の「受肉」であった。**モーセが荒野でへびを上げたように** 「すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた」(民数記21・9)とある。**人の子もまた上げられなければならない** ここに「天上のことを語った場合、どうしてそれを信じるだろうか」(12)とイエスが言うような不思議な神の奥義がある。あろうことか、神の御子が呪いのへびと同じ仕打ちをお受けになるのである。**それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである** 「ここに「行い」ではない「信仰」の奥義がある。十字架に示された「上から」の力を、信仰によって風のように受け止めるときに、人は新しく生まれて、永遠の命を得ることができるのである。

参考文献 注解書 Blandards(New Century Bible), G. R. Beasley-Murray(Word), 等。その他 The IVP Bible Background Commentary:NT

3日 礼拝メッセージ例

聖書	ヨハネ3・15
タイトル	新しく生れる(二つ目の誕生日)
暗唱聖句	だれでも新しく生れなければ、 神の国を見ることはできない。 ヨハネ3・3
目標	新しく生れる恵みにあずかる。

導入

(小野)

「明けましておめでとう」は元旦でした。今日は今年最初の日曜日、おめでとう！今年になって初めて会う人もいるかも。もしかして、きょう、「お誕生日おめでとう」の人がいるかもしれませんね。皆、一つは必ず誕生日を持っています。二つある人いますか？「ハッピー！」と言う人は一体だれでしょう。今日は、二つ目のお誕生日を持てるようになるお話です。

新しく生れるってどういうこと？

ある夜のことです。こっそりひっそりイエス様を尋ねて来た人がいます。一体だれだろう？と思つて迎えると、なんとニコデモさんではありませんか。きつちりと神様の教えを守る人々、清い特別な人々と見られていたパリサイ人の一人です。しかもその中でもリーダー格のご年配の方です。そのニコデモさんがイエス様に言いました。「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようないしは、だれにもできません」と。するとイエス様の不思議な返事が返ってきました。「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を

見ることはできない」。ニコデモ先生は白髪頭をひねったでしょう。「エッ？もう一度、お母さんのお腹に入つて、そして生れてくるのですか？そんなことできつこないです。イエス様。私たちだって、「新しく生れなければ」なんて言われると、「エッ？もう一度、お母さんのお腹に入つて、それから、また、オギャアと出てくるのかな」ってだれでも思つてしまいますよね。でもイエス様の言われることは全くそうではないようです。

新しく生れるにはどうするの？

イエス様は言われます、「水と霊とから生れるのだよ。肉から生れる者は肉、霊から生れる者は霊。霊から生れるのはちょうど風のようなもの。風は思いのままに吹いて、その音は聞こえても、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない」。ニコデモ先生にとってはチンプンカンプン、頭の中まで、真っ白つて感じでした。私たちも同じですね。でもイエス様はさらによくわかるように、荒野の蛇のお話をしてくださいました。イスラエルの人たちが神様につぶやいて、神様が送られた蛇にまかれて苦しんでいた時のこと。モーセが高く竿に掲げた青銅の蛇を仰いで見た人は、毒が取り去られ、アレアレと思う間に、不思議なように、どうしてかわからないけれど、説明できないけれど、癒されて、命が救われたのでした。イエス様は、「わたしはあの蛇のように、十字架の上に上げられるのだよ、そして、わたしを信じて仰ぐ人は、罪の毒が取り去られて、新しい神の命、永遠の命が与えられる、つまり、新しく生れるのだよ」と話してくださいました。

例話 〈ジョージ・ミューラーの新生〉

一八〇五年九月二十五日にドイツに誕生。これが肉より生れた第一の誕生日。国の税金の徴収人であつた父も、母も、信仰には無関心で、彼は幼少の頃から親をだましたり、お金を盗んで使ったり、14歳でお酒やカード遊びにおぼれ、ついには16歳で獄に入りました！父の助けで獄を出て、外側はまじめにつくろい、やがてハレ大学に入学。不良仲間のベーターと遊び歩いていましたが、ベーターはふまじめな生活が恐ろしくなり、ハレの町にいたワグナーさんというクリスチャンの家の集会に出て救いを求めました。ベーターの変化に驚いたジョージもその集会に同行し、そこでひざまずいて祈る人々の姿に、電気に打たれたようにとらえられ、やがて20歳の秋、あれほどの罪と悪習慣の奴隷ジョージが悔い改めて全く新しく生まれ変わり、一万人以上のみなし子の父となりました。新しく生れることは何て素晴らしいことでしょう！心の生れ変わり、二つ目の誕生日ですね。

♪Happy Birthday to You! Only ONE will not do. Trust JESUS as Saviour, And then you'll have TWO!

♪ハッピーバースディトゥー！
一つだけでは足りない。
イエス様信じれば、二つになるよ！(小野私訳)

あなたの第一の誕生日はいつでしょう？イエス様を心に迎えて新しく生れ、二つ目の誕生日を頂きましょう。

♪字のない本のうた♪ (ホ・子どもさんびか63)



聖書 ローマ3・9～26

テーマ 神の恵み

序論

(鎌野善)

先週は、神の国に入るためには、たといユダヤ人の教師であっても「新しく生れる」ことが必要であることを学んだ。今週はさらに進んで、新生がすべての人に不可欠であるのは、全人類が罪人だからという事実に基づきたい。だからこそ、「神の恵み」が必要だった。パウロは本書で、まず異邦人の罪（1章後半）とユダヤ人の罪（2章）を指摘する。そしてこの章でそれらをまとめた上で、罪人が新しく生れるためになされた驚くべき「神の恵み」を宣言するのである。パウロがここで用いている三つの重要語に焦点をあてて、聖書の示すこの偉大な真理を浮かびあがらせてみよう。

一、罪とは何か

自分がユダヤ人であることを認めつつ、パウロは、「わたしたちには何かまざったところがあるのか」と問う。たとい選民のユダヤ人であっても、自分を正当化して「怒りを下す神は、不義である」（5節）などと主張する者は、まさに罪人そのものである。そして、「ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあること」を詩篇とイザヤ書からの引用で実証する（箇所は研究資料を参照のこと）。まず冒頭で「義人はいない、ひとりもない」と結論を宣言した後、パウロは、①神を求めないこと、②善を行わないこと、③言葉で人を傷つけること、④平和を求めず、流血や破壊を行うこと、

⑤神を恐れないことが罪であると指摘する。②④⑤は対人関係における罪だが、最初の①と最後の⑤は対神関係における罪であることに注目しよう。神との正しい関係をもたないことが罪の本質であり、その結果、人は道徳的にも破産するのである。「神の恵み」を知るためには、まず自分の罪に気づかねばならない。旧約聖書に記されているこの鋭い指摘を自分にあてはめてみるなら、だれが「自分には罪がない」と言えようか。「望遠鏡を用いないで天文学を研究する者が愚かであるように、自分の罪を通さずに神を見ようとする者は愚かである」（矢内原忠雄）。罪が自覚されてこそ、神の恵みの素晴らしさがわかってくるのだ。

二、律法とは何か

パウロは続いて、「律法の言うところは、律法のもとにある者たちに対して語られている」と記すが、この律法とはモーセの定めたユダヤ人の律法だけを意味するのではない。2・15にあるように、異邦人の場合も「律法の要求がその心にしるされている」。だから、「全世界が神のさばきに服する」のである。書かれた律法でも、心の中にある律法でも、それを行わない者は、神が厳しくさばかれることを忘れてはならない。ならば、だれが神の前に義とされるのか。だれもない。（「律法によつては、罪の自覚が生じるのみである」）。

日本文化には、儒教倫理の強い影響がある。しかし、心の奥底までご存知の神の前に立つとき、だれがそれを守りとおしていると言えようか。儒教の教えも、一つの「律法」なのである。

三、恵みとは何か

律法を行うことによつてはだれも神に義と認められないからこそ、神は別の方法を示してくださった。（それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、すべて信じる人に与えられるものである）。たとい義の行いができていない者でも、ただ主イエスを信じるなら、義と認めてくださるというのだ。これこそ「神の恵み」である。

24節はこの恵みの三つの特徴を示している。①「価なし」とは、善行・犠牲的精神・宗教的儀式・高潔な人格などが全くなくても良いということ。②「神の恵みにより」とは、ただ神からの一方的な贈り物だということ。③「キリスト・イエスによるあがないによつて」とは、主イエスが私たちの罪の身代わりとなつて死んでくださったからということ。特に③は重要である。（今までに犯された罪を、神は忍耐をもつて見のがしておられた）が、見逃しが永遠に続くなら、神の義が無意味になってしまう。だから、何の罪もない方（神以外のだれが罪のない者でありえようか！）が身代わりになられたのだ。それによつてはじめて、神も義となり、人も義とされることが可能となった。恵みは、神の自己犠牲なしにはありえない。

結論

「神の恵み」は、また神の痛みでもある。ひとり子を犠牲にするほどの偉大な神の愛。それがわかるとき、軽く「ありがとう」と言うだけではすまないだろう。安価な恵みではなく、恵みに応えて、この身を主に献げる者になりたい。

研究資料

(中島)

テキスト

9 ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にある 神の前に罪がないと言える人は、ユダヤ人であれ異邦人であれ、だれ一人としていない。

10・12 詩篇14・1・3からの引用。

13・18 それぞれ、詩篇5・9(13)、詩篇10・7(14)、イザヤ59・7・8(15・17)、詩篇36・1(18)からの引用。のど、舌、くちびる、口、足、目といった体の各部に言及し、罪の力がそれらを支配することを強調している。特に、言葉に関わる体の部位が多いことに、注目したい。

20 律法を行うことによって、すべての人間は神の前に義とせられない 「律法を行う者が、義とされる」(2・13)とあるが、ユダヤ人でも異邦人でも、実際それを行える人は皆無なのである。

22 イエス・キリストを信じる信仰による神の義 それは律法の行いによってではなくキリストを信じる信仰によって与えられる。そこにはなんらの差別もない すべての人が等しく罪の下にあり、そのすべての人に、恵みも等しく備えられている。

23 すべての人は罪を犯したため、神の栄光をうけられなくなっており 人が創造のはじめに与えられた「神の」かたち(創世記1・26)こそが、ここで言う「栄光」であろう。様々な意味が考えられるが、最重要の一つは、神との交わりと言えよう。それが罪のゆえに損なわれたのである。

24 価なしに、神の恵みにより かつてのパウロにとって義認とは、律法をひたすら守ることによ

って、最終的にたどり着く目的地であった。しかし神の方法は、まったく順番が逆である。すなわち、終わりではなく初めに、神が、恵みによって信じる者たちに義を宣告するのである。その宣告が、人がまだ何もしていない前になされるのならば、それが行い(すなわち「価」)の結果であるはずがない。価なき恵みなのである。キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである「あがない」とは、奴隷を解放するために買い取ること。信じる者たちが義とされるために、神の独り子という尊い代価が支払われたのである。

25 その血による キリストの血は、決して象徴的ではなく、現実に支払われた代価である。信仰をもって受くべき その恵みに、人は信仰によってあずかる。この信仰は、神の前に何らかの価値のある、ある種の行いでは決してない。それは、神の言うことをそのとおりに信じ、その恵みを感じ謝して受け取るという、心開かれた態度を指す。あがないの供え物 ここで「あがないの供え物」と訳される[ギリシア]ステーリオンは、七十人訳(ギリシア語の旧約聖書)では「贖罪所」(出エジプト25・22)に用いられる語である。贖罪所とは二つのケルビムが付いた契約の箱のふたである。そこに年に一度、大祭司が犠牲の血を振りかけて、全国民のあがないを為すのである。キリストがそれだと言うときに、キリストを「贖罪所」そのものとするよりは、それが換喩(象徴的なものに置き換える比喩)として示す「あがないの供え物」と訳するのが適当であろう。すなわち十字架という贖罪所に、キリストが犠牲として供えられるので

ある。なお文語訳や新改訳では「なだめの供え物」と訳している。キリストの血によって「神の怒り」(1・18)が遠ざけられるという意味で「なだめ」の意味も当然そこに含まれている。ただし注意しておくべきことは、この「供え物」を用意するのは、決して人ではなく、神だということである。神が備えてくださった「供え物」は、「不信心と不義」(1・18)を取り除くだけでなく、同時に、そのような態度と行為に対する罰を免れさせるのである。今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが 神がそれまでの罪を見逃してきたのは、神が不義であるということでは決してない。キリストの贖罪の効力は、キリスト以降だけでなく、それ以前も含めた、すべての時代の人々に及ぶものだからである。「全世界の罪のため」(1ヨハネ2・2)と言うとき、そこにはすべての時代のすべての人の罪が含まれている。

26 こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである キリストが自らをささげられたことによって、神の義が明らかにされ、また罪人が信仰によって義とされる。これはキリストが神と人との両方の立場を代表しておられるからである。人間の代表として、キリストは、人の罪が引き起こしたさばきを、すべて引き受けてくださった。同時に神の代表として、キリストは、神のゆるしの恵みを、ご自身を通して人々に与えてくださったのである。

参考文献 注解書 MBlack(New Century Bible), F.F. Bruce (Tyndale) 等。その他 Theological Dictionary of the New Testament, Vol.13. 等。

聖書
タイトル
暗唱聖句

ローマ3・9～26

神の恵み(アメイジング・グレイス)
彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる
あがないによって義とされるのである。
ローマ3・24目標
ただ信じて義とされる恵みにあ
ずかるう。

導入

(小野)

今年はまだ二〇一〇年です。21世紀に生れた人がだんだん増えてきますね！さて、年が明けてうれしいことは、新しい年になってうれしいことは、そう『お年玉！』でしょう？どれくらいもらったのかしら？ほしいうものを買いましたか？貯金しましたか？クリスチャンのお父さんやお母さんには言われたでしょう、「十分の一は神様に献金するのよ」って！『お年玉』があればいいのは、何もしないで、タダでもらえるってことですよ。それを「恵み」と言うのです。きょうは、『お年玉』どころではない、神様からの『驚くべき恵み』について知って、それを受け取りたいのです。

みんな罪人

20世紀に生れた人たちと、21世紀に生れた人たちと、どこが違うのでしょうか？もちろん年令は違いますが、実はみんな同じ、神様の前には罪人なのです。「いや、そんなことないです。私は罪人なんかじゃありません。私は正しい人間です。正しい子どもです」と、だれもが言いたいのはよくよくわかります。では、お尋ねします、「今までけんかしたことないですか？うそをついたことないですか？ごまかしたことないですか？盗んだことないですか？腹を立てたり、ねたんだり、憎んだり、恨んだり、あんな人いなければいいのにとか思ったことないですか？」他にも胸に手を当てて思い返してみたら、あるある、本当に私は正しくなんかないとわかるでしょう。アダムとエバが罪を犯してからずっと、「オギャー」とお母さんのお腹から生れて来た人は、みんな罪人なのです。きょうの聖書の中にも、「義人はいない、ひとりもない」(10)「すべての人は迷い出て」(12)「全世界が神のさばきに服する」(19)「すべての人間は神の前に義とせられない」(20)とあるとおりです。子どもはだれかに教えてもらわなくても、親に反抗したり、いたずらしたり、悪いことをどんどんしたり、言ったりします。アダム、エバの時から何千年も変わりません。全地に広がっていったすべての民族、どの国のどの人もみんな罪人なのです。だれ一人正しい人はいません。それだったら、一体どこに人類の希望があるの!?と叫びたくなるでしょう？

アメイジング・グレイス(驚くばかりの恵み)

タダで、何もしないで、信じるだけで、すべての罪がゆるされて、神様の前に「正しい人」とされるたつた一つの道を、神様が開いてくださいました。それが、救い主イエスを信じる道です。聖霊によってマリヤのお腹に宿って生れられたイエス様だけは、聖なる方、義なる方です。そして

私の罪を代わりに負って、十字架で刑罰を受けて死んでくださいました。これをあがないと言います。罪をおわびして、イエス様の十字架は私のためと信じますと告白して、義とされるのです！何というありがたい驚くべき恵みでしょう！

例話 《ジョン・ニュートンの回心》

一七二五年、地中海航路の船長ジョンの一人息子としてロンドンに生まれました。信仰篤かった母エリサベツは、彼が7歳になる直前に天に召されてしまいました。父にならい船員となったジョン・ニュートンは、すさんだ生活へと落ちていきました。酒やかけごと、船が停まる港では行く先々で放蕩三昧でした。17歳になって西アフリカで多くの苦難をなめました。ポルトガル人が経営する農場での奴隷生活でした。着る物もろくろく与えられず、自殺さえ考えました。一七四七年、父の依頼で、ある船長の力により、やっと国へ帰る道が開かれました。船の中で「キリストにならいて」の本を読み、心が開かれていきました。激しい暴風雨に遭い、船が沈むかと思う中、船中の水をバケツで外に出しながら、「私は罪人だ！」とジョン・ニュートンは強く自覚し、それと共に、幼いころ、心に刻まれたイエス様、本で触れたイエス様を心に迎え、深い悔い改めと共に、彼の心は変えられました！新しく生れ変わりました！「驚くばかりの恵み！こんな、どうにもならないならず者のような私さえも、救ってくださった」と讃美歌をつくったのです。

♪驚くばかりの♪ (新聖歌233番)



聖書 Iヨハネ1・5〜10

テーマ 罪の赦しゆる

序論

(大頭)

先週はローマ人への手紙から、罪の本質は神との正しい関係を持たないことであり、その結果、人は道徳的にも破産することを見た。(もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない)とあるとおり、すべての人に罪がある。真理とはキリスト。キリストを知らないから罪がわからず、罪がわからないからキリストを求めない。人はこの膠着状態こうちやくからどのようにしたら脱出できるのだろうか。

一、罪人の私を…

そもそも罪とは何か。ヘブル語は罪を描写する用語に富んでいるという。主なものを挙げれば、①掟(おきて)を知らながらそれを破る意図的な罪、②意図したわけではないが、人間としての限界から生じる失敗や不十分さ、③正しいことを知りながら逆を行おうとする人の心の歪んだ状態ゆがなどである(デニス・キンロー「エマオの道で」より)。注目すべきは第三の用法である。教会が伝統的に「原罪」と呼んできたのがこれである。人は罪を犯すから罪人なのではない。罪人だから罪を犯すのである。神は善人の過失をとがめ立てして裁かれるのではない。御国を嫌い、仮に御国に入ったとしてもそこを御国でなくしてしまう人間性の歪みを裁かれるのだ。

だから真の罪の告白は、犯した個々の罪の告白

にとどまってはならない。ウェスレーは説く。「悔い改めなさい、つまり自分自身を知りなさい：自分自身が罪人であること、そしてどのような状態の罪人であるかを知りなさい：あなたは…全く腐敗している…あなたの意志は…邪悪に曲がり、歪んでしまつて、すべての善・すべて神が愛されることを嫌い、あらゆる悪に…神が嫌われるあらゆる醜行に傾いている」(説教「神の国への道」より)。

自分が罪人であることの徹底的な告白は、主イエスのたとえの中に見ることができる。ルカ18章の取税人は「遠く離れて立ち、目を天にむけようとししないで、胸を打ちながら」、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と言った。自分の真の姿が罪人であることを認識するとき、もはや個々の罪に対するいかなる言い訳も無意味である。まったく情状酌量の余地のない罪人として神の裁きを観念することが真の罪の告白である。もちろん子どもたちは、そのような抽象的な概念を口に出すことはしないであろう。けれども、彼らが言外に語るこの告白を聞き取ることにつとめたい。

二、罪の赦しの十字架

〈神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし〉は、不思議な表現である。真実で正しいかたが、自分でも滅びを観念した罪人を裁かないで見過ぐすというようなことがあるだろうか。けれども、ここで神をエジプトの神アヌビスのように秤はかりを用いて冷酷に死者の罪を量るようなお方と想像してはならない。〈真実〉は、ご自身に信頼する者を捨てることがない神の忠実さ、〈正しい〉さは「わ

たしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリスト」(2・1)を賜ったことに基づいている。神の秤は最初から私たちの方に傾いているのだ。私たちのなすべきことは、罪の告白によって私たちの罪を主イエスの上に置くことだ。かつてイスラエルで罪を犯した者は、犠牲の動物の頭に手を置いて罪の贖いとした。同じように罪の告白は機械的ではなく、十字架の主イエスを思う痛みをとまなつて行われる。

三、聖霊によつて

「理解の目は暗くされ…神についても、自分自身についても、知るべき事柄を何一つ知らない」(ウェスレー前掲説教) 私たち自身が罪人であることを知つて告白するに至るのは、神の恵みによる。「あなたがたの救われたのは、恵みによるのである」(エペソ2・5)とある。神の恵みは何一つ知らない魂に働いて、罪人である自覚を与える。それは聖霊による恵みであつて、人には不可能なことも可能にする。けれども同時に、光が与えられた時に、その光に従っていくかどうかは私たちにかかつていることも知つておきたい。(わたしたちが自分の罪を告白するなら)とあるように。告白するのは私たちである。私たちは神の恵みによつてそうする力を与えられるのである。

結論

罪の告白を躊躇する子どもは多い。けれども、神は必ずそこへ導いてくださることを信じて祈ろう。

研究資料

(中島)

ヨハネはまず、「神は光」(5)であることを宣言する。そして続いて、人が神と交わりを持っていると主張しつつも、それが偽りである場合を見抜く三つの基準を示す(6, 8, 10)。さらに第一と第二のものに対しては、それぞれの対極である、神と真実に交わっている者に与えられる恵みを語る(7, 9)。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば…」(9)という聖句は、この文脈の中で、神との真実な交わりを持つ者への恵みとして語られていることを心に留めたい。

テキスト

5 神は光であって、神には少しの暗いところもない 光は、神が与える命や救いを示すたとえであると共に、神ご自身の性質をあらわす表現でもある。神の遣わされた救い主は「すべての人を照すまことの光」(ヨハネ1:9)と呼ばれ、また自ら「わたしは世の光である」(ヨハネ8:12)と宣言された。この御子によって啓示された神は、きよさと正しき、善と真実との源であって、神には、不浄、不義、悪、偽りはいっさいない。

6 神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら… これが神と交わりを持つという主張の真偽を明らかにする一つ目の判断基準。「やみの中を歩く」とは、言うまでもなく、神に背を向けた、罪にとどまる生き方を指す。そしてやみの中を歩くことと、神と交わりを持つことは相容れない。「悪を行っている者はみな光を憎む」(ヨハネ3:20)からである。

7 しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば ここに先の事柄の対極が示される。すなわち神のきよさ、正しさに背を向けないで生きる者には次のような恵みが伴う。**わたしたちは互に交わりをもち** ここで実現する交わりは、単に私たちと神との交わりだけでなく(それだけでも十分に素晴らしいのだが)、お互いの交わりにまで及ぶ。それは互いに衝突を避けるという消極的な交わりにとどまらず、積極的に楽しむ交わりである。なぜなら、それぞれが神ご自身との交わりを楽しむからである。光の子は、その行いの上に神の性質を反映するのである。**御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめる** しかし人は、光の中に来るならば、自分の罪と対峙せねばならない。文脈に基づけば、この場面はこれから入信しようとする人の最初の認罪というよりは、むしろクリスチャンが神と交わりを持つて生きる中で、神の光に照らされて浮かび上がってくる罪との対面ととらえる方がよりふさわしいだろう。いずれにせよ、そこでの選択肢は、自分の行いが明るみに出ることを恐れてやみに戻るか、それとも罪を認めつつ光にとどまるかである。そして人が後者を選ぶときに、驚くべき恵みがあらわされる。すなわち、神と自分を隔てるはずの罪が、瞬く間に消え去る。それを実現するのが「御子イエスの血」なのである。この恵みは、クリストに連なる者に対して、永久に与え続けられるものである。クリスチャンになっても罪を犯してしまうことがある。しかし、それだ私たちと神との交わりが断たれてしまうのではない。神が私たちをきよめてくださるからである。

そして、そのために大切なことが続いて語られる。**8 もし、罪がないと言うなら** 二番目の基準は、自分には罪がないので「イエスの血」など必要ないという主張である。愚かだと一笑に付すかも知れないが、自分には無関係と決めつけるべきではない。ここには、ひとたび救われたなら、罪とは無縁になるという間違った考えも含まれている。そこまで行かずとも、信仰歴の長さゆえにかえって認罪が困難になることもあり得ることを、私たちは謙遜になつて肝に銘じなければならぬ。

9 もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば 罪を否むことの対極として、私たちのなすべきことは、罪を告白することである。それは単に罪を認めるだけでなく、それを神の御手に委ねることを意味する。**神は真実で正しいかたであるから** しかし、私たちの罪がゆるされるのは、罪の告白という行いのゆえではない。そうではなく、神のご自身の約束に対する真実さのゆえである。これこそがゆるしの揺るぎない根拠なのである。**10 もし、罪を犯したことがないと言うなら** これが第三の判断基準である。二つ目と似ているがさらにエスカレートしていると言えよう。このような主張は、聖書の証言、さらに神が人のためにしてくださったことと完全に食い違う。その人か神かの、いずれかが間違っているのである。そして、どちらが間違っているかは言うまでもない。

参考文献 注解書 F. F. Bruce (Eerdmans), I. H. Marshall (New International Commentary), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書
タイトル
暗唱聖句

Iヨハネ1・5・10

罪の赦し(闇から光へ)

もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。

Iヨハネ1・9

目 標

罪の赦しを確信し、光の中を歩もう。

導入

(小野)

一月十七日(火)午前五時四十六分。何の日時か知っていますか？今の教会学校のお友だちはまだ生れていなかったですね。恐ろしくて悲惨だった、阪神淡路大震災でした。一九九五年でしたから、今日でちょうど丸15年です。明るく美しい神戸の街が、一瞬、まっ暗闇となり、多くの人々の心も闇の中に突き落とされてしまいました。15年後の今は、外観はもうすっかり元のように明るく美しく復興の光に包まれています。愛する人々たちを亡くした人々の心の痛みと悲しみは、この日を迎えることによりがえって癒されたいでしょう。震災や天災による闇も恐ろしいですが、もっと恐ろしいのが罪による闇です。罪の闇はいつでも忍び寄ってくるし、犯してしまった罪の闇は自分の力や努力では追いついてしまえません。今日は、そんな私たちへの希望のメッセージです。

闇の中から

「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺く

ことであって、真理はわたしたちのうちにない」とあり、「もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない」とあります。神様の言葉の光に照らされると、私たちは自分の罪がよくわかりますね。神様が与えてくださっている良心の光によれば、「罪を犯したことがない」なんて、とても言えませんね。私たちは皆、罪の闇の中に歩んできているのです。そんな私たちの罪をぜんぶゆるしてくださって神様の光の中に招き入れてくださると、今日のみ言葉は教えてくれます。

光の中へ

どうすればいいのでしょうか？「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば」とあります。実は神様はもうとくに、私たちの罪を、犯してきたあの罪、この罪をちゃんとご存知なのです。それを私たちが「そのとおりです」と認めて、神様の前で告白する、つまり、一つ一つの罪を言いあらわすのを待っていてくださっているのです。あなたにも、今までお父さんやお母さんと先生にしまった悪いことを、「ごめんなさい。こんな悪いことをしてしまいました」と言っておわびしたことがあるでしょう？お父さんやお母さんや先生たちはよくわかっていても、あなたがそうやっておわびに来るのを待っておられたはず。神様もそうなのです。一番におわびをしなければならぬお方が神様です。おわびをすると真実で正しい神様が、その罪をゆるしてくださり、すべての不義からきよめてくださるといふ驚くべき約束です。このみ言葉は全くこのとおりですよ！是非や

つてみてください。

例話 〈山田晴枝先生の救い〉

神戸新開地に、今も湊川伝道館が建っています。その隣や近くにはたくさん映画館がありました。山田先生は高校時代に大変な病気をし、生死をさまよいましたが守られました。しかし何度も手術をし、その後遺症として脚が不自由になられました。でも手に職をもつて自分の力で生きていくのだと、岡山から神戸に出てきたのです。ある日、友人が「山田さん、松竹座の前で待って」と言うので「ああ、きつと一緒に映画かな」と思い、待っていると、「あら山田さん、じゃあ入りましょう」と松竹座の隣の湊川伝道館に連れ込まれました。初めて聞くイエス様のお話、それに、その後の外人の婦人宣教師が、初対面の山田さんに向かって、「アナタニモ、ツミ、アルデショー？」と言うものから、腹を立てて、プリプリー怒って自分の下宿に帰りました。寝ようとしてもその宣教師の声に耳について眠れません。ふとんを深くかぶってもダメです。その時ハタと、お母さんの財布からお金を盗んだ小さい頃のことを思い出され、次から次と罪の記憶がよみがえります。山田さんはガバと起きて、ふとんの上に座りなおして、一つ一つ、残らず、泣きながら罪を告白しました。「ごめんなさい、ゆるしてください」と。「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」(マタイ9・2)。新しい涙があふれ、罪の赦しに感激！中国への宣教師として、また、神戸で牧師として用いられました。♪どうしてかわかるかな♪

(ホ・子どもさんびか61)



聖書 1ヨハネ3・1～3

テーマ 神の子

序論

(大頭)

神の子とされた私たち。それが実子であるとするなら私たちは神のDNAを受け継いでいるのだろうか。創世記1・26には、神が「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」られたとある。だから神の子とされることは、実際には失われていた私たちが回復されることなのである。

一、失われた私たち

それにしても、墮罪は徹底的である。詩篇8・5～6には「ただ少しく人を神よりも低く造つて、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれまして」とある。人は本来、被造物のよき管理者として立てられ、それらを神の栄光のために用いることができるはずであった。ところが、人はその「栄えと誉れとを」投げ捨てて、被造物に支配される偶像礼拝者になりはてた。それは、「神のように」(創世記3・5)になりたいという誘惑に屈した結果であった。

あの放とう息子は帰るべき場所を知っていたが、人は神の存在さえ知らない。自分が神の子であることも、もはやわからなくなっていたのである。

二、神の大きな愛

その私たちが神の子とされたのは神の大きな愛による。神はユダヤ民族を興し、絶えず預言者た

ちを送って、この世がご自分に立ち返るのを待ち続けて来られたが、時が満ちて御子イエスをお送りくださった。ところが、人々は自分たちを捜しに来てくださった神の手である御子を受け入れるどころか、かえって十字架につけた。けれどもその時、ただ言葉だけで世界を創造された神は、完全な沈黙を守られた。はずかしめられ苦しみと絶望の中に滅びていく御子を見捨て、私たちを選ばれたその沈黙こそが、神の最大の愛なのである。

三、神の子の現在と未来

神の子とされた私たちを待ち受けるものは何であらうか。やがて主イエスがもう一度この世界に来られる再臨のとき、私たちは造られたかたちに回復される。それは御子イエスに「似るものとなる」ときである。けれども、栄化と呼ばれるその姿はあまりにも輝きに満ちた姿であるため、ヨハネにも「まだ明らかではな」かった。

「この望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」。主イエスを拝する栄化を待ち望む神の子は、自らを罪から遠ざける。「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」(9節)は、1月3日にも参照した。この場合の罪は「悪である」と知っていながら故意に行う」という意味での罪。1月17日に挙げた罪の第一の定義である。栄化に対して、この罪からのきよめを聖化と呼ぶ。それは愛のない生き方の対極にある生き方であるゆえに、「全き愛」や「キリストの思いと心に生きること」、とも呼ばれる。

四、では、弱さはどうなのか

しかし、クリスチャンの問題は意図的な罪だけではないことを私たちは知っている。幼児体験や育った環境から身につけた性格や感じ方、体や心の病の結果としてのたましいの傾向、あまりの悲しみに打ちのめされたゆえの弱さが私たちにはつきまとう。ほとんどの人は実際以上に自分を卑下して責め、そうかと思うと今度は何でも他人の責任にして自分を見つめることができない、2つの傾向の間を行ったり来たりしているという(イムマヌエル聖宣神学院「きよめと人間性」より)。弱さは罪ではない。けれども、弱さに誘惑が加わるときに簡単に罪に発展することも事実である。

しかし、十字架の上で「わたしはかわく」と叫ばれた主イエスは、私たちの弱さのいつさいを経験してくださった。このお方は弱さをもいやすことができるのだ。Ⅱコリント3・18に「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」とある。当時の鏡はおぼろげにしか映すことができなかった。今はそのようにしか主を見ることができなくても、それでも神の子は、み顔を仰ぐ。弱さを知り、とりなし、いやすお方と交わるのである。

結論

新生・聖化・栄化に加えて、神の恵みは弱さにも及ぶ。その恵みの豊かさを私たちがまず経験し、子どもたちに語りたい。

研究資料

(中島)

クリスチャンが経験する恵みには「すでに」と「これから」の二つの次元がある。彼らがそのことをしっかりと心に留めた上で「今」を正しく歩めるようにすること、それがこのテキストの目的である。今の恵みに不安を抱えている者には、彼が「すでに」神から生まれた者であつて、神の子としての特権を持つのだ、ということを確認させる。他方、自分はクリスチャンとしての恵みをすべて経験したと思っている者がいれば、そのような考えは、神が「これから」先に用意しておられる恵みを無視することだということに気づかせる。このようにしてヨハネは、キリスト者が、すでに得ている恵みに堅く立ちつつ、また将来の恵みの完成に望みを置いて、今をキリストのきよさにならい、罪から離れて歩むようにと励ますのである。

テキスト

1 わたしたちが神の子と呼ばれるためには 父親が目の前にいる子をわが子として名前で呼ぶ。彼はその行為によつて、その子が自分の実の子であることを正式に承認する。これはそんな場面を思い出させる表現である。その子は法的な縁組による養子ではなく、実子なのである。イエスは「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」(マタイ5・9)と言われた。この祝福が今や一般化されて、信じる者すべてを含むのである。「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ1・11)とある

通りである。どんなに大きな愛を父から賜わったことか 神の子とされること(すなわち新生)と神の愛のテーマが連なつて語られる箇所として有名なのはヨハネ3章である。その箇所、新生をめぐるニコデモとの対話に続くのは、神の愛についての最も有名な聖句である(ヨハネ3・16)。信じる者に永遠の命を得させるために、ひとり子をさえ惜しまずに与えてくださった神の愛。その大いなる愛によつて、人は神の子とされたのである。**わたしたちは、すでに神の子なのである** 神が「光あれ」と言われたときに光があつた(創世記1・3)。それと同じように、神が人を「神の子」と呼ばれたからには、その人は神の子なのである。**世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである** 迫害下にあるキリスト者は、時には神から見捨てられたかのように感じる。しかし世がキリスト者を自分たちの側にいるものと見なさないことは、むしろ彼らが神に属していることの証拠なのである。世はイエスを憎んだ(ヨハネ15・18)。ように、神の子を憎むからである(13)。

2 愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である このようにクリスチャンがすでに得ている恵みを再び確認した上で、ヨハネは次のこと、すなわち彼らがこれから体験するさらなる恵みについて話を進めていく。しかし、**わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない** しかしその恵みがどのようなものであるかは、まだ明確には示されていない。けれども、すでに与えられている恵みについての知識は、信じる者たちの未来の状況が、さらに素晴らしいものになることを確信させるものである。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている イエスの来臨の時(2・28)、クリスチャンは彼に似るものとされる。その全貌はまだ明らかにされていないが、推測できることは、今信じる者たちが部分的に享受している特権が、その時には完全なものになる、ということであろう。元来、人は「神のかたち」に創造された(創世記1・27)。その神の似姿がアダムの罪によつて損なわれたのであるが、それを第二のアダムなるキリストが回復してくださるのである(ローマ5章)。そのまことの御姿を見るからである この変貌はイエスのまことの姿を見ることによつて起こる。「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント3・18)とあるように、人は、イエスの栄光を見ることによつて、その栄光にあずかるのである。そのイエスを見るための条件を、ヨハネは次に告げるのである。

3 彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする

「心の清い人たちは、さいわいである。彼らは神を見るであろう」(マタイ5・8)とあるとおり、キリストの栄光にあずかるために彼のまことの御姿を見るための条件は「心の清い」ことである。4節以降でヨハネは「罪からの分離」について語るが、これこそがここで言う「きよさ」であろう。すでに「神の子」とされており、なおキリストにある完成を望み見る者が、追い求めるべきはこれである。

参考文献 1月17日分と同じ。

聖書
タイトル
暗唱聖句
目標

Ⅰヨハネ3・1〜3
神の子
わたしたちは、すでに神の子なのである。 Ⅰヨハネ3・1
神の子として大きな愛を父から受けていることを知ろう。

導入

(松浦み)

寒い毎日ですが外に出て、道行く人々の様子をみてみませんか？コートの襟を立てて背中を丸めて歩いている人、寒さ知らずの様子でビヨンピョン歩いている人、とぼとぼと下を向いて歩いている人など色々です。また電車やバスに乗ると色々な表情の人に出会います。にこにこうれしそうな顔、暗くて沈みこんだ顔、苦虫をかみつぶしたような顔、やる気満々の顔など。あなたの顔や姿はどんなでしょう。「♪どうしてか、わかるかな、ぼくらのうれしいわけ、それはね、イエス様が救ってくれたから。十字架の血潮によって心の罪をゆるされ、うれしいな、うれしいな、救われたのだから♪」。こんな顔だったら素晴らしいですね。

すでに神の子

先週のみ言葉を思い出しましょう。(一緒にみ言葉を唱える) 私たちがイエス様の十字架を信じて、自分の罪を告白するなら、神様は真実な方なので罪をゆるし、一度も罪を犯したことがない者のように私たちを迎え入れてくださるのです。そして、私たちは今や神の子なのです。では「今」とはいつのことでしょうか。今は、イエス・キリストを信じて

いる現在を指しています。あなたの手を自分の胸にあててよく考えてみてください。あなたは今イエス様を信じていますか？あなたの心にイエス様をお迎えしていますか？「はい」と心から言えるならあなたはすでに神の子とされているのです。ヨハネ1・12には、「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」と約束されているからです。では、なぜ信じるだけで神の子とされるのでしょうか？それは父なる神様の深く大きな愛によるプレゼントなのです。12月にはクリスマスをお祝いしましたね。父なる神様は、ひとり子イエス様をこの世にプレゼントしてくださいました。そして罪とほろびしかない私たち人間を救い、神の子として永遠の命を与えるために、イエス様を十字架につけて殺すことを許されました。その犠牲の愛によって、私たちはイエス様を信じるだけで神の子となる道が備えられたのです。何と驚くべき大きな愛でしょう。

今後、私たちはどうなるのか

神の子とされた私たちは今後どうなるのでしょうか？それはまだ明らかにされていないことも多くあります。しかし、はつきりとわかっていることがあります。それは「イエス・キリストが現れる時、私たちはキリストに似る者となること」です。なぜなら、イエス・キリストの本当の御姿を見るからです。聖書には天上におられるイエス様のお姿が記されています。

一、天上で父なる神の右に座し、大祭司として私たちのため、とりなし祈っておられるイエス様
二、ペテロたちと山に登られた時、光り輝く白

い御姿に変貌されたイエス様

三、ヨハネがパトモス島で見た、幻の中の威厳に満ちた姿のイエス様

私たちは再臨の日に、イエス様と顔と顔を合わせて見るのです。今、聖霊は、神の子とされた私たちがイエス様と同じ似姿となるように、あらかじめ決めてくださり、その準備をしてくださっているのです。それは、イエス様を多くの兄弟の中で長子とならせるためなのです。新聖歌22の4節に「御神はわれらの父親なれば、御子なるイエスをば『兄上』と呼ばん」という歌詞があります。が、再臨の準備が進められている事がわかります。

神の子の生き方

キリストについてこの望みを抱く人は、キリストがきよくあられるように、自分自身をきよくする生き方を願います。人と比べてどうこうというのではありません。キリストを自分の生き方の目標としてキリストのようになりたいと願うのです。

最後に、皆さんは子どもですからこれから成長して色々な事を見たり、聞いたり、経験することでしょう。教会から足が遠のいて、イエス様を忘れてしまうようなことが起こるかもしれません。しかし、私たちの生涯はこの地上に生きている間だけのものではないことを、しっかりと覚えていてください。やがて時が来たらすべての人は、この地上から姿を消します。しかし、イエス様を信じる神の子には、こんなに素晴らしい未来が約束されていることを心に刻み付けて歩んでください。一人一人の人生が祝されるよう心から祈ります。♪心から願うのは♪ (新聖歌382 1節)



聖書 ローマ8・12～17 テーマ 相続人

序論

(大頭)

先週は神の子とされた者たちがどのような祝福にあずかっているかを見た。今日の箇所も「肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ外はないからである。しかし、霊によつてからだの働きを殺すなら、あなたがたは生きるであろう」と、御霊によつて生きるならば、罪から守られることを示す。では、神の子たちの将来には何が待ち受けているのだろうか。

一、神の栄光の相続人

神の子たちは「神の相続人であつて、キリストと栄光を共にする」。神の相続人が相続するのは栄光である。神から受ける神の栄光である。主イエスは十字架を前に「父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今みにわたしを輝かせて下さい」と祈り、復活してその栄光にあずかられた。このキリストの永遠の栄光を、私たちもキリストと共に受ける（17節、新改訳参照）。黙示録は「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。」（22・3～5）と記す。私たちは神と小羊を仰ぎ見つつ支配する。そして、神のかたちを回復され、神に似た者となる。これが救いの完

成であり、都と同じように私たちのうちにも「のろわるべきもの」である神への不従順や不信仰、「夜」（暗闇）である兄弟姉妹へのねたみや怒りは何一つ残らないのである。

二、恥じ入る私たち

「多くのクリスチャンは、永遠を本気で受け止めていない」（リック・ウォーレン）という。事実であろう。そして、たまに永遠を本気で受け止め、神の栄光の相続人であることを思うとき、喜びよりは胸の痛みに似た気おくれを感じるものである。神は愛である。であるから、たとえば愛の巨章として有名な1コリント13章の4節から7節の「愛」を、「神」または「キリスト」に読み換えてみるならば、実にそのまま納得できる。「神（キリスト）は寛容であり、神（キリスト）は情深い。また、ねたむことをしない。神（キリスト）は高ぶらない、誇らない。不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」。ところが、「愛」を「私」に読み換えるならば私たちは恥じ入るばかりである。「私は寛容であり、私は情深い。また、ねたむことをしない。私は高ぶらない、誇らない……」。

私たちは、ときに寛容どころか、しばしば高ぶり、かなり不作法で、とてもすべてを耐えることなど不可能である。神の相続人である私たちの中には暗闇がある。永遠を本気で受け止めようとするとときに、私たちの内にある暗闇の存在が暴露されるのである。

暗闇を秘めているから滅びるというのではない。神の子でなくなるというでもない。そのような恐れからではなく、神の子とされているがゆえに私たちは神に似ていない自分を悲しむのである。

三、御霊によつて

内村鑑三は三位一体を説明して、「家族で一人の子が非行に走ったと考えよ」と言う。父は威厳の愛、母は慈悲の愛、兄は同情の愛をもつて共同で救おうとする。同じように神の霊が父のごとく、聖霊が母のごとく、主キリストの霊が兄弟のごとく、上より、下より、横より三位の神の全体的活動で私たちを救ってくださったのだと「ロマ書の研究」。

同じ三位の神は、神の子の暗闇を取り除くために総がかりで私たちの内に神のかたちを回復してくださる。パウロが、聖霊を「イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊」すなわち父の御霊、「キリストの霊」（9節）とも呼ぶのはそのためである。神にはできるのである。

問題は、その神の御霊が私たちの内に働いてくださることを私たちが許すかどうかである。（霊によつてからだの働きを殺す）とある。ひとたび、愛に欠ける私たちを神にゆだね、そして、ずっとゆだね続けるならば、神は私たちの中に「自分のかたちを回復してくださることができるのである」。

結論

神の子とされた私たちは、神の栄光の相続人である。恵みを阻んでいる暗闇を告白し、悔い改め、み前に差し出し、どこまでも神のかたちに回復していたらこう。神の子である私たちの存在は、この世界の災いではなく祝福なのだから。

研究資料

(井上)

敬虔派の指導者シュペーナーは、聖書全巻を指輪にたとえると、ローマ人への手紙は宝石の部分に当たり、8章はその宝石の最も輝く部分であると言った。ローマ8章は聖書全巻でも神の最高の恵みについて記されている箇所である。

テキスト

12 果すべき責任を負っている者 責任(𐤀)オフエイレーテス)新約聖書中7回引用される。道義的な責任としての意味合いも、貸借的な責任の意味合いも持つ。信仰者の持つべき責任とは何か。信仰者は、罪が赦され罪と死の法則から解放された者だが、自分勝手な自由が与えられた者ではない。神と人の前にどのように生きるかという責任を持つ者である。**肉に従って生きる** 肉(𐤀)サルクス)は新約聖書中147回引用され、七つの用法がある。一般には人間の肉体、生活に用いられ、罪や悪の代名詞ではない。パウロの用法でも単一ではない。ガラテヤ2・20では、十字架による自我の磔殺後の信仰者の歩みが語られている。ここでの「肉に従って生きる責任」とは、前段の信仰者の責任ではない。ローマ8章全体で語られる「肉」は明らかに、生来の自己中心性、肉欲的な傾向を表している。「肉の思いは神に敵する」(8・7)と語られるように、神に相反するものである。信仰者が目指すものは、肉の支配からの解放である。

13 あなたがたは死ぬ外はない 既に6節では「肉の思いは死である」と記されている。肉に従って生きる生き方は、罪から滅びへと向かわせる。霊

によってからだの働きを殺す 古来、解釈の分かれてきた箇所である。霊は言うまでもなく聖霊である。からだの働きとは、生理的・生命的な身体機能のことではない。13節にも繰り返されている「肉に従って生きる」という肉欲的な欲望に支配されやすいからだのことである。殺す(𐤀)サナト)は、現在形で記されており、殺し続けるという継続、または、繰り返し殺すという反復で用いられている。一度限りのことではなく、肉との戦いに勝利し続けなければならない。主にあって、殺されることは生かされることであり、死ぬことは生きることにつながっていく。

14 すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である 聖霊に信頼し、委ね、服従する信仰者に神の生命がとどまり、神の子とされる。

15 奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである 聖霊によって神の子とされることは、恐れによって支配され、自らの意思を持たない奴隷とされることではない。むしろ罪の奴隷から解放され、平安と自由を持つ神の子としての身分が授けられる。アバ、父よ 神の子であるイエス自身が「アバ、父よ」と神に祈られた(マルコ14・36)。私たちが神に対して、イエスと同じ呼びかけを持ちうる者とされる。このことは、神の子とされた何よりの証拠である。

16 御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる ウエスレー説教53篇には本箇所から、聖霊の証という説教が2篇収められている。ジョン・ウエスレーにとって、救いの確証としての御霊の証は、揺

るがせられない信条であり、使信であった。父サムエルが病床で言い残した「内なる証こそがキリスト教の証明だ」という言葉が、ウエスレーに強く響いていた。聖霊の確証を過小評価する理性主義者と、理性を否定する熱狂主義者の間にウエスレーは立っていた。ウエスレーは聖霊による直接的な証と、私たち自身が持つ内面的な証が結合し、共同して神の業を証しすると主張した。これは、救いの確証について中道を行く受け止め方であり、み言葉にかなった考え方である。

17 もし子であれば、相続人でもある 義認の具体的な結果として、神の子とされることは先週の箇所で学んだ。子とされることは、実子ではなかったものが養子とされることである。当時のローマ法の下で、相続に関して、血のつながった実子も、後から迎えられた養子も区分はなかった。神の子ではなかった私たちにも、神の栄光の富が公平に分配されるということなのである。神の子とされ、相続人とされるということは驚くべき栄誉である。キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。神の救いに与り、イエスに従う者となっても、万事が都合なことばかりとは限らない。イエスが十字架への苦難の道を歩まれたように、私たちにも信仰のゆえの苦難がある。苦難をも信仰をもって受け止め、神の栄光を仰ぎ見る者は、イエスと共同の相続人とされるのである。

参考図書 The New International Commentary on The New Testament "The Epistle to The Romans" (Eerdmans) 他

聖書	ローマ8・12～17
タイトル	相続人
暗唱聖句	もし子であれば、相続人でもある。 ローマ8・17
目標	キリストが相続するすべてを与えられることを信じて感謝しよう。

導入

(松浦み)

新しく迎えた二〇一〇年もあつという間に一カ月が経ちました。今日もすばらしい聖書のみ言葉を学びましょう。「相続人」という言葉は皆さんには聞きなれない言葉ですね。この言葉の意味は、財産や代々その家に伝わる権利や義務や地位などを受け継ぐ人のことを言うのです。チンプンカンプンですね。そこで、ある物語からその事を考えてみることにしましょう。

小公女セーラ

アメリカ人作家バーネット夫人作「小公女」を知っている人いますか？テレビのアニメでも数年前に放映されていました。この物語は、セーラ・クルーという少女のお話です。彼女は赤ちゃんの時に、お母さんが死んでしまっています。そこでお父さんの仕事先のインドで暮らしていました。8才になったとき、お金持ちの少女が学ぶイギリスのロンドンにあるミンチン学園で勉強することになりました。たった一人の家族のお父さんと別れて暮すのは、母のいないセーラにとってはとてもつくく心細いことでしたが、セーラはこの学園でしっかりと勉強し、友だちにも優しく楽しい学園生活を

送っていました。ところが11才の誕生日パーティーの最中に突如、悲しい知らせが届いたのです。インドのお父さんが死んだというのです。ミンチン校長は急に態度を変え、セーラに屋根裏部屋で暮すように命じ、その日からセーラは学生ではなく、小間使いの女の子として働くようになります。彼女は一生懸命働き、服も靴もぼろぼろになつてしまいましたが、お父さんが死んでお金がないので買うこともできません。そんなある日、屋根裏部屋のセーラの部屋に1匹のサルが迷い込んできました。お隣のインド人の召使がサルを探しているのです。そんなことから隣のインド人と仲良くなります。彼はイギリス人のカリスホードさんの召使でした。カリスホードさんは一人の女の子を探するためにインドからやってきたのです。セーラと対面した時、あなたのお父さんの名前は？と聞くので、「ラルフ・クルーです」と答えました。彼はセーラのお父さんと一緒に仕事をしていた人で、ダイヤモンドの山を掘り当てたことも知らずに病気で死んだラルフ・クルーの莫大な遺産を娘に手渡すためイギリスに来ていたのです。セーラは、父の残した遺産を相続して、その日以来、裕福な暮らしをするようになりました。

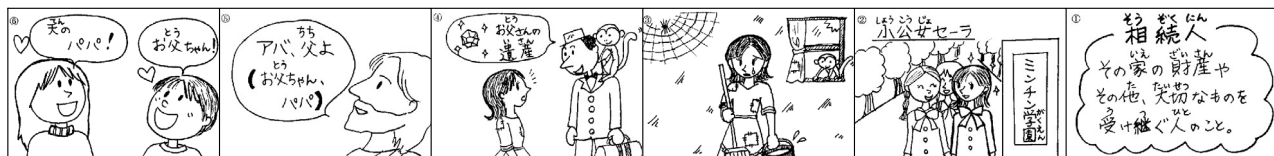
相続人は全財産の持ち主

セーラはラルフ・クルーの子ともなかったのですが、父の残した全財産を相続することができたのです。先週、イエス様を信じた私たちは神の子であると学びました。それはどういうことかというところ、イエス様が天のお父様を「アバ、父よ」と呼びなつたように、私たちも天の神様を「アバ、父よ」と

呼ぶことができる特権を与えられたと言ふことなのです。「アバ、父よ」という呼びかけの言葉は、子どもが「お父ちゃん、パパ」と自分の父親に呼びかけるときに使う親しみを込めた言葉です。もし、知らないおじさんに「お父ちゃん」と言つて近づいて言つたら、「変な子やなあ」といやな顔をされるでしょう。また、「なんやな、文句あるんか！」と蹴飛ばされるかもしれません。しかし、神様は私たちを子として扱つてくださり「お父ちゃん！パパ！」と親しく呼ぶことができるようにしてくださつたのです。この「アバ、父よ」という祈りの言葉は、イエス様を信じた者の心に、「私は神の子とされているんだ！」という確信をしつかりと根付かせる祈りの言葉なのです。さあ、あなたも、天のお父様にむかつて、「アバ、父よ」と祈つてごらん下さい。私たちには相続人として、神の恵みのすべてが約束されているのです。だから、何も心配することはありません。天のお父様である神様は、み心にそつて私たちを導いてくださるのです。

聖書には、私たちがどんな願い事についても地上で心を合わせて祈るなら、天におられる父なる神様はそれを叶えてくださると約束されています。また、あらゆる場合に、感謝をもって祈りと願いとを神にささげ、あなたがたの願い事を神様にお話するなら、人のすべての考えにまさる神様の平安があなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあって守つてくださる（ピリピ4・6、7）と約束されています。何と素晴らしい天のお父様でしょう。信じて祈る日々を過ごしましょう。

♪祈つてごらんよわかるから♪（新聖歌481）



聖書 ローマ5・1～11

テーマ 栄光にあずかる希望

序論

(水川)

イエス・キリストを救い主と信じる信仰によって、義とされた(研究資料参照)者は、神の怒りから解放されるばかりか、神との平和を得ています。さらに、この神との平和は、神の栄光にあずかる希望をもたりますのです。

一、希望の根拠

イエス・キリストを信じる信仰によって救われた者は、「神との平和を持っています」(新改訳)とパウロは言いました。「平和」(☞)エイレーネ)は、ヘブル語では「シャローム」にあたります。織田昭師は、「アダムが失った本来の輝きを復元する『原型回復』の救いです」と説いています。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなつて」(ローマ3・23)いるボロボロの人間が、キリストの血で罪が赦され「原型回復」されることを、ここで宣言しているのです。たとえ自分の目に、神の栄光にはほど遠いと思えない悲しい者であっても、やがて、自分の目でもその回復を確認させていただけるのです(2)。ですから希望がゼロかマイナス(患難)の時でも、キリストに生きる人間には、そのマイナスの要因すら大きなプラス(希望)に変えられて喜びに満たされるようになるのです。

二、希望を生み出す連鎖(3～4)

患難は働き、大きなプラスを生みます。「生む」とは、「自分で働いて生み出す、成し遂げる」の意味です。信仰に生きる人にとって、患難は自動的に「忍耐」を作り出してくれるプラス要因になるのです。「忍耐」とは「踏みとどまる、逃げ出さない強さ」(詳訳)です。キリストに生きている人は、患難に会っても踏み止まる強さが与えられ、逃げ出さない根の生えたような人、練達した者に育てられるのです。「練達」を、新改訳では「練られた品性」と訳しています。神様は私たちの内に、テスト済みの確かさを作り上げてくださるのです。このような練達が、希望を生み出すのです。希望とは実に、輝く未来への展望です。自分で発見した展望ではなく、神からの展望、神が約束してくださるものを見る目が養われるのです。普通ならば希望なんか持てるはずがないところで、神が開いてくださる広がりが見えてくるのです。ただ、この事が起こるためには、患難を受けている人自身に、一つの基礎が整えられていなければなりません。

三、希望を生み出す基礎(5)

そのような希望は、私たちを決して失望させる(欺く、恥をかかせる・詳訳)ことはありません。どうしてこの希望は、そこまで確かなものなのでしょう。そのわけは、その人の存在の根底に、神の愛がドーンと注ぎ込まれているからです。この事実を何によって確かめられるでしょうか。それは、私たちがキリストを信じた時に与えられた聖霊によってです。主は「わたしが去って行かな

ければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。…真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」(ヨハネ16・7、13)と約束してくださいました。そして、復活されたイエスは弟子たちに「彼らに息を吹きかけて仰せになった『聖霊を受けよ』」(ヨハネ20・22)と、約束を実現してくださいましたのです。

このように、私たち、信じる者に注がれている神の愛を、現実のものとして体験させてくださるのは、聖霊によるのです。しかし、目に見えない聖霊が、私たちの内に注がれていることを確かめられないで、とまどっている信仰者が意外に多いのです。「あなたは聖霊のバプテスマを受けなければなりません」とか、「あなたはきよめられましたか?」などと問われて、「私はまだ受けていないのでは?」と思う人も出てきます。聖霊の受領の根拠を人の体験に置くと、人の体験は千差万別であるため、わからなくなってしまうのです。根拠を、人ではなく、聖書の言葉に置くことが肝要です。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたもの」(Ⅱテモテ3・16)だからです。私たちの信仰の根拠を、聖書の言葉に置く人は幸いです。

結論

患難を希望に変える力は、キリストを信じる信仰によって生み出されます。それを確認できるのは、聖霊によって注がれている神の愛によります。このみ言葉を信じて従うところに、経験も伴ってくるのです。

研究資料

(井上)

救いの全貌を示すローマ人への手紙前半の流れの中で、5章はどのような位置づけであろうか。序文は始まりから1・17までである。続く1・18から3・20までが人間論すなわち罪悪論である。そして、3・21から5・21までが義認論、6・8章が聖化論と大きく捉えることができる。本聖書箇所には、義とされた者の恵みが記されている。

テキスト

1 信仰によって義とされた 義とされた(ヱ)デイカイオー、原文では文頭に記され、強調されている。受動態が用いられ、自らを義とするのではなく、神によって義とされるのである。義とするとは法廷用語である。神により罪が赦され、神に受容され、神との新しい関係が確立される。義とされる根拠は、イエスの十字架のあがないを信じる信仰によるのである。人間の善行、修行などの道徳的な行いによるものではない。**主イエスキリストにより、神に対して平和を得ている** 信仰により神によって義とされた者は、神との間に和解をいただく。神との和解によって平和(ヱ)エイレーネー)がもたらされる。神から与えられる平和は霊的なものである。この世の苦難がなくなり幸福が与えられるとは限らないが、信仰者の魂にもたらされる、揺らぐことのない、深い安息である。

2 彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ 恵み(ヱ)カリス)は、神の愛を受けるに価しない罪ある人間が、その恩恵を受けることにある。「彼により」とあるように、イ

エスの十字架のあがないによって恵みは開かれた。「立っている」と「入れられ」は完了形で記されており、完結した行為として受け止められる。**神の栄光にあずかる希望** 栄光(ヱ)ドクサ)はヘブル語ではカーボードとなる。旧約において主の栄光は、嵐、火山、雷、地震など自然現象を伴って表された。後に、神の臨在の表れとして契約の箱が収められた幕屋に満ち、エルサレムの神殿に満ちた。新約において神の栄光はイエスによって現された。卑しい罪人である人間はイエスの十字架のあがないによって、神の栄光を受ける者となった。神の恵みを受け、神の栄光に与る者は、神に栄光を帰す者となる。神の栄光は終末をもつて完成される。神の救いに与った者は、最終的な栄光にまで導かれる神の約束への希望を持つ者である。

3 患難は忍耐を生み出し 患難(ヱ)スリプシス)は新約聖書中、悪に対する報い、終末時代の患難などの用法がある。ここでは人格を引き上げ、研ぎ澄まさせる働きとしての患難である。忍耐(ヱ)ヒュポモネー)は患難から生まれる。消極的な、単なる我慢ではない。神によって与えられる徳性である。

4 忍耐は練達を生み出し 患難によって忍耐が、忍耐によって練達(ヱ)ドキメー)が生まれる。私たちの人生の苦難も、忍耐を持ち神を仰いで歩むならば練達にまで昇華されうる。**練達は希望を生み出す** 練達の先には希望が開かれていく。神から与えられる希望は、人が持つ空しい望み、夢、幻ではない。神が成し遂げてくださるという確信である(5節・希望は失望に終わることはない)。

5 聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注

がれているからである 聖霊は良き賜物を私たちに与える。神の愛は聖霊を通して私たちに注がれている。信仰者が結ぶ御霊の实のリストの最初は愛である(ガラテヤ5・22) ことにも注視したい。

6 弱かったころ 弱かった(ヱ)アセネース)道徳的な善を行なえない弱さの意味である。**不信心**(ヱ)アセーベス、形容詞)名詞形アセーベイアは不敬虔の意味があり、信仰がないというだけではなく、神を畏れない者の姿である。

8 神はわたしたちに対する愛を示されたのである 罪人のためにイエスは十字架で命を捨てて、あがないを成就された。神の愛が無条件で、惜しみない、無償のものであることが解る。

9 神の怒りから救われる 人間にとって怒りは普通の感情の一つであるが、「神の怒り」という言葉はそれとは異なる。神の怒りは、感情に任せたものではなく、罪に向けられている。神の怒りは愛と相容れないものではない。神は聖なるお方であつて人の罪を見過ごせないが、愛のゆえに人を滅ぼすことはできない。神の罪への怒りはイエスの十字架によってなだめられ、満足せられた。

10 御子の死によって神との和解を受けた 人間の心には神への敵意さえある。和解(ヱ)カタラゲー)は一方的な神の恵みの業である。和解は御子の十字架の死によってなされた。私たちは罪の縄目から解き放たれ、神との平和の内に生きる。

11 神を喜ぶ 和解を受けた者の積極的な生き方は、神を喜びながら歩む生涯である。

参考図書 先週の他『The Epistle to The Romans』Leon Morris (Eerdmans) 他

聖書

ローマ5・1～11

タイトル

栄光にあずかる希望

暗唱聖句

神の栄光にあずかる希望をもつて喜んでいる。ローマ5・2

目標

決して失望に終らない希望に生かされよう。

導入

(松浦み)

寒い毎日を迎えています。球根にとっては、この寒さがとても大切なのです。秋に植えたチューリップ、ヒヤシンスなどの球根は今、冷たい土の中で春を待っています。そして春になれば、芽を出し、茎を伸ばし、美しい花を咲かせます。嫌われ者の毛虫もやがてはさなぎになって、美しい蝶になり羽ばたきます。イエス様を信じる者はどんな希望をもつて生きることができのでしょうか。

神との平和・人との平和

私たちは暗くて冷たい罪の中を歩んでいる者ですが、イエス様を信じることによって罪がゆるされ、神の子とされました。そして神との平和を得て、神様と共に歩む者とされたのです。皆さん、十字架をよく見てください。縦と横が交わった形をしているでしょう。縦は私たちと神様との関係を表します。横は私たちと他の人との関係を表します。そのどちらにも中心にイエス様がいてくださいます。罪をもった私たちのところに、ひとり子イエス様が天から遣わされて来てくださいます。そのイエス様の愛と犠牲と復活によって、神様との平和が与えられ、神様と人とが交わるこ

ができる一本の道、縦の道が開かれたのです。また、人と人との間にもイエス様が中心にいてくださらなければ平和な関係を持つことはできません。お友だちや兄弟が仲良くしたいと思っても、「わたしが、わたしが」「ぼくが、ぼくが」と言って自己主張をしていたのでは、平和な関係を持つことはできません。イエス様は互いに愛し合いなさい、敵のためにも、嫌いな人のためにも祝福を祈りなさいと教えてくださいました。イエス様にあつて横の道も平和なものとなるよう、「どうぞ、私たちの中心にイエス様いてください」と祈りましょう。

希望は失望に終らない

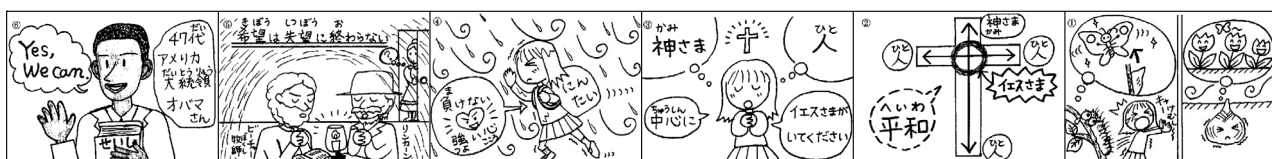
イエス様にあつて歩む私たちには、やがて、すばらしい神の栄光が与えられると約束されています。ですから、私たちは、どんな苦しい困難の中を通過しても、忍耐をもつて、歩むことができるのです。忍耐強く従って歩んでいく時、私たちの中にはどんなことにも負けない強い心が育ってきます。そして、その心には、ゆるぎない希望が満ち溢れてきます。その希望は、決して失望に終わることのない確かなものなのです。

例話

「アンクルトムの小屋」という奴隷制度を元にした本の著者ストウ夫人のお兄さんは、ヘンリー・ビーチャーという牧師でした。当時のアメリカ大統領はアブラハム・リンカーンでした。神様を信じる大統領は、奴隷として働かされている黒人たちに自由を与えることを願い、一生懸命、解放運動をしました。しかし、アメリカ南部の人々は奴隷を解放することに反対して、とうとう同じ国内

で北と南に分かれて戦争が始まりました。リンカーンは小さい頃から神様を信じ、聖書を読み熱心に祈る人でしたが、戦争に突入してしまい、その心配は非常なものでした。ある晩、一人の男が顔を隠してビーチャー牧師宅を訪れました。奥さんが二人の話し声に耳を傾けると二人の祈りの声が聞こえてくるのです。その男の人は夜明け前に帰って行きました。牧師は訪ねてきた人がだれか、長い間奥さんに知らせませんでした。国を心配した大統領が、牧師と一緒に祈るために、遠い所をはるばる一人で変装してきたのです。熱心な祈りはついに聞かれ、北軍が勝ち、奴隷は解放されました。しかし、その後も色々な戦いがあり、黒人のルーサー・キング牧師は「私には、夢がある」と語り黒人、白人など肌の色の違いなく、共に歩める日を望み見て主にある希望に溢れて語りました。二〇〇九年一月には夢かと思うような出来事が実現しました。第47代アメリカ大統領として黒人初のオバマ大統領が誕生したのです。就任式でリンカーン愛用の聖書に手を置き宣誓をする姿は「希望は失望に終わることはない」との言葉が確かなものであることを証明する瞬間でした。さらにまた大統領はブラハで「核兵器廃絶」の演説をし、二〇〇九年ノーベル平和賞を12月に授賞しました。Yes, We can. 私たちにはできる。神様を信じる者には希望があります。あなたは、苦しくてつらい道を歩んでいるかもしれないけれど、決して失望しない希望に生かされる者となりましょう。

♪十字架わが力♪ (ホ・子ども賛美歌115)



聖書 ガラテヤ2・15～21 テーマ キリストが内に

序論

(水川)

ユダヤ教的キリスト教が、ガラテヤのキリスト者に混乱をもたらしました。彼らは律法の遵守なくしては救われないと主張したからです。ペテロでさえ、その影響を受けた(11～14)のです。これは、キリスト信仰の本質をゆるがす問題であるため、パウロは放置できませんでした。

一、信仰によってのみ救われる(16)

パウロは、(人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰による)と説きます。ユダヤ人だけでなく、仏教や儒教の影響下に置かれてきた私たち日本人も、良い行いをしたり、宗教的な修練を積むことによって救われるとの思いが強くなります。しかし、律法を守りどんなに修練を重ねても、人間の持つ本質的な弱さの解決には至りません。

〈キリスト・イエスを信じる信仰〉とは、ただイエスを信仰の対象として受け入れると言うのではなく、キリストに接ぎ木される(結ばれる、IIコリント5・17新共同訳)、すなわち本来に一体とされるということです。真の信仰により、私たちがキリストに結ばれる時、キリストの命が私たちに実を結ばせる(ヨハネ15・5)ようになるのです。決して行いによるものではありません。

二、キリストと共に十字架につけられた(19)

小林和夫師は、自分がキリストと共に十字架につけられたことを、自分自身の内側に向かっての十字架経験と、外側に向かつての十字架経験という二つの面から説き明かしています。

自分の内側に対する答えは、「キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである」(5・24)とのみ言葉に置きます。「肉」(神を第一にしない自己中心性)は、すぐに罪と結び付きやすいのです。義理人情などの「情」は、人間的に良い面もありますが、情が欲を呼んできます。物質欲、肉欲、などがそうです。そういうものによって、自己中心的な、わがままな自我を形成してしまっています。このどうにも自分では処理できない肉と情を持つ私たちと一緒に、イエスが十字架で死んでくださったのです。私を悩ます古き人(肉と情に悩む人)がイエスと一緒に死んでいるのだから、罪の力が抑えられ、私にはありません。このように信じる信仰こそが、私たちの内側の問題に対する勝利の秘訣なのです。

自分の外側に対する答えは、「この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」(6・14)とのみ言葉です。外側すなわち、世間、世俗に対しても、十字架につけられて死んだのです。私たちは、現在所属している社会、歴史の中に生きている存在ですが、その中で、神につく者として生きることができるのです。私の牧する地域では、今でも檀家制度が支配しています。教会員は昔からの習俗の中で、キリストに生きるのです。市政

も学校行事も習俗に支配されており、それが当然と思い込んでいるのです。キリスト信仰に生きることは異端者扱いです。世の圧力を受ける前に、世の圧力を意識して悩んでしまう人もあります。この圧力に対しても死んだ者であり、恐れる必要がないと信じて堅く立つ人は、明白に信仰の立場を明示していますから、社会も認めるのです。

三、キリストが内に生きておられる(20)

キリストを信じる私たちは、単に内側の問題、外側の問題に死んだ者だけで終わらずに、キリストがわが内に生きておられるという恵みの経験を持つことができるのです。自己中心、身勝手な生活から解放されて、新しい私というものが生きていることを知るようになります。アル中歴40年の人が、罪を告白しキリストを信じました。彼は翌日、教会の新来会者に伝道を始めたのです。信じた直後から酒が飲めなくなり、仕事に復帰して償いの生活を始めました。禁断症状もなく(これは医学的に不可能です)普通の生活に戻ったのです。信じた瞬間に神の恵みの力が彼を支配して、新しい生活を作り上げてくださったのです。彼の場合が特別なのではなく、神はイエスを信じる誰に対しても、内にあって生きてくださいます。

結論

私たちの側では、ただキリストを信じるのです。神は信じた私たちに、キリストの命を注ぎ込んでくださり、神の御心に生きる新しい人をスタートしてください。決して行いにはよらないのです。

研究資料

(井上)

パウロの宣教によつて地中海世界に福音が伝えられ、異邦人の回心者が生まれていった。その中で、異邦人クリスチャンについて分争が生じ、使徒行伝15章に記されているエルサレム会議が開かれる。異邦人クリスチャンもユダヤ人同様、割礼を受け律法を守るべきかが議論された結果、異邦人クリスチャンは、割礼を強要されず、最低限の戒め以外は自由であることが確認される。ガラテヤ地方にある教会には、福音を骨抜きにするユダヤ的な律法主義が入り込んでいた。パウロはこの手紙で、救われるのは行いではなく、信仰によるのであり、恵みであることを強く語っている。

テキスト

15 異邦人なる罪人ではない ユダヤ人以外の民族は罪人であるという考え方は身勝手な暴論に聞こえる。ユダヤ人には、神から直接に律法を授与され、守ってきたという自負心、誇りがあった。

16 キリストを信じる信仰によって義とされる 歴史を越え、み言葉に拠つて立つなら、信仰義認という教理こそが絶対の規準となる。律法の行いによつては、だれひとり義とされることがないユダヤ人が、神からの律法を守り通して救いに達しようとしても、なし得なかった。

17 キリストは罪に仕える者なのであろうか 17、18節は解釈が難しい箇所である。この箇所は、律法を重んじるユダヤ主義者に対する反論が記されている。パウロは信仰義認を語る時に、律法主義者への反論として、断じてそうではない(原文では「メ

ゲノイト」という言葉を用いた。ローマ6・2及び6・15にも同じ言葉が用いられ、「断じてそうではない」と訳されている。ローマ、ガラテヤ双方に記された律法主義者が持つていた福音への反論の主旨は、以下のようなものである。律法が必要とされないのなら、道徳的な判断をどのような規準でくだせるようになるのか。信仰によつて義とされるのなら、罪をいくらか犯してもよい、すべて赦されるのではないか、というものであった。キリストは罪に仕える者という言葉は、罪を容認する者という意味である。人は信仰によつて義とされても、律法に照らすなら罪人のままでと言う主張からであった。そんなことは絶対にならないというパウロの反論である。

18 いっただん打ちこわしたものを、再び建てる

打ち壊したものは罪の世界である。そこに再び戻ることは、正しく罪人の証明であつて、神の恵みに与つた者には、本来あり得ないことである。

19 神に生きるために、律法によつて律法に死んだ 律法は人を救い、命に与らせることはできないことを見てきた。律法をどれほど追い求めても、人は律法を満たすことができない。律法の定めは死と滅びであるとも言える。わたしはキリストと共に十字架につけられた

共に十字架につけられた 共に十字架につけられた(「メ」スタウロー)は、完了形の受身で記されている。成し遂げられた過去の事実であり、古い自我は十字架で葬り去られたという宣言である。イエスの十字架は歴史的な事実を越えて、現実の私たちに生きて働く。罪によつて滅びへと向かう私たちは、律法によつても自分を救い得ない。イエスの十字架によつて、死から命へ、滅びから永

遠に移されていく、大いなる転換点がここにある。

20 生きているのは、もはや、わたしではない。

キリストが、わたしのうちに生きておられるのである 十字架を信じ義と認められた信仰者は、肉体の命をもつて生きていることには変わりはない。

霊的な次元では、古き人(ローマ6・6)は十字架に釘付けられ、罪から解放されている。イエスが私たちの内に生きてくださることによつて、神の御心に従つた生活をなすことができる。罪の僕ではなく、イエスの僕として生きるのである。わたしのためにご自身をさげられた神の御子を信

じる信仰によつて、生きているのである 信仰者は律法に死に、信仰によつて生きるのである。私

たちは失敗や過ち、人の言葉、自らの感情などで振り回されるのではない。み言葉の約束に固く立つことによつて、揺るがない信仰を持ち続けることができる。イエスを内にいだきながら、聖い大路を歩むものとならせていただく。

21 わたしは、神の恵みを無にはしない ここに記されているように、神の義が律法によつて得られるとすれば、イエスの十字架は無意味となる。

イエスの十字架こそ、私たち罪ある者を義とし、滅びから救い、聖い歩みへと導く。私たちがこの事実を信じないのなら、大いなる恵みを無駄にしまふことになる。パウロは声を大にして、イエスの十字架を信じる信仰こそがすべての基となることを語っている。

参考図書 New International Greek Testament Commentary F.F. Bruce (Eerdmans) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句

ガラテヤ2・15～21

キリストが内に
キリストが、わたしのうちに生
きておられるのである。

ガラテヤ2・20

目 標
古い私をキリストと共に十字架
につけて、キリストを心に主と
して迎えよう。

導入

(松浦み)

干し柿を食べたことありますか？干し柿は甘い
ですね。でも、干し柿にする前の柿はしづくて、
まずくて、一口食べたなら「ウエツ、ペツ！」とは
きだすでしょう。その渋柿の木に、甘い柿の枝を
接ぎ木したらどうでしょう。あら不思議。その木
は甘くておいしい実を結ぶようになりますよ。

キリストと共に十字架につけられる

私たちは渋柿によく似ています。そのままでは
おいしい実をならせることはできません。うそを
ついたり、けんかをしたり、いじわるをしたり、人を
ねたんだり、両親には従えなかつたりで、良い子に
なりたいたいと思っても失敗してしまいます。どうし
たら、神の前に義(正しいもの)とされるのでしょうか。
良い行いをするのですか、教会学校に励んで
出席することですか、献金することですか、お友だ
ちに親切をすることですか。どれも大切なことだ
す。しかし、残念ながらそういう行いによつては神
様に受け入れられることはないのです。ただ一つ
の方法は、ただイエス様を信じる信仰です。これこ
そが、神様に受け入れられ、救われ、神の前に義とさ

れる唯一の方法なのです。ヨハネ3:16には、「神
はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し
て下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅
びないで、永遠の命を得るためである」と記され
ています。この世に遣わされたイエス様は人の子
としてナザレの村で育ち、大工の子として成長さ
れ、やがて苦しみの十字架につき、その流された
血と死、墓からの復活とによつて、救いの道(義
とされること)を完成してくださいました。この
イエス・キリストを信じることによつてのみ、人
は義とされるのです。その他の方法はありません。
「わたしはキリストと共に十字架につけられた」
とは、キリストの死にあずかるバプテスマを受け
ることによつてキリストの死と結び合わされ、キ
リストが死なれたように生まれつきの自己中心な
古い人である私が死ぬことを意味します。それと
同時に、キリストが復活されたように、新しい命
に生きるものとされたことも意味します。渋柿に
甘柿を接ぎ木すると、古い柿の性質はなくなつて
新しい甘柿の木になるように、キリストの十字架
に接ぎ合わされることによつて、全く新しい命に
生きる者とされるのです。

キリストと共に生きる

「生きているのは、もはや、わたしではない。キ
リストがわたしのうちに生きておられる」とは、
キリストを信じて救われ、生まれ変わった新しい
「私」がキリストと共に生きることを意味します。
私たちは、自分の努力で神を喜ばせる生き方はで
きません。そうではなく、信じる私たちの心の中
に住んでくださるキリストに支配していただき、

生かされるのです。これこそが、神に喜ばれる人
生なのです。あなたの心の王座にイエス様を迎え
入れ、「わたしがいまい肉にあつて生きているのは、
わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげら
れた神の御子を信じる信仰によつて、生きている
のである」と告白しましょう。

自分の力によらず、キリストのように神に生か
される日々は、何と軽やかで喜びに満ちたもので
しょうか。この神様の恵みを無駄にすることなく、
神様中心の生活をしましょう。そして、私たちが
愛し、その命までも与えてくださったキリストの
愛にお応えする日々を過ごしましょう。

あるクリスチャンの証

「キリストがわたしの内に生きておられる」とい
う一人のクリスチャンの証しをしましょう。イエス
様を信じるまでのその人の人生は、思い煩いに満ち
ていました。ああでもない、こうでもないといふ心配ば
かりの取り越し苦労の人生でした。しかし、イエス
様を心にお迎えし、イエス様と共に歩む者とされた
今では、イエス様が内に住んでいてくださると思つ
ただけで喜びが溢れてくるのです。晴れても感謝、
雨でも感謝。いろんな困難も、イエス様が最も良い
ようにしてくださるとわかれば、これも感謝です。右
足をあげるたびに、「おお！感謝！」左足をあげる
たびに、「おお！ハレルヤ！」と、さんびと喜びに満
ちたものとなりました。輝いた顔で証されました。
皆さんも、心の王座にイエス様を迎え入れ、「キ
リストがわたしのうちに生きておられる」と賛美
しつつ歩む日々を過ごしましょう。

♪主は今生きておられる♪(リビングプレイズ16)



聖書 エペソ3・14～21 テーマ 内住のキリスト

序論

(水川)

パウロはこのエペソ書の1章～3章にわたってキリストによる救いの教理を語ってきました。そして14節から教理の締めくくりの祈りをささげるのです。この祈りには、キリストの救いがもたらす恵みの実態が明らかにされています。それこそ、内住のキリストの恵みです。

一、内なる人を強くしてください(16)

外なる人はわれわれ自身の手で強くすることもできるし、その方法もたくさんあります。しかし、内なる霊の人を強くすることは、人の手ではできません。それを成し得るのは、ただ神の霊と神の力のみです。そして、内なる人が弱り、病み、疲れ果てていけば、外なる人がいかに強く、栄え、賢く、健やかであったとしても、人は平安がなく本当の喜びが持てない状態に置かれるのです。

聖書には、キリストを信じる者の心には、キリストが住んでくださると約束しています。けれども心が整えられていない人の内には、イエス・キリストは住むことはできないのです。皆さんだつて壊れてゴチャゴチャになっている家に帰りたいとは思わないでしょう。

では、内なる人の強さとは、どういうことをいうのでしょうか。その一つは、愛に生きる強さのことです。「もしわたしたちが互に愛し合うなら、

神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである」(1ヨハネ4・12)「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」(1ヨハネ4・16)とあるとおりです。

けれども、「私は、神に喜ばれるように真心で人愛したことはなく、友のために命を捨てることもできない」というような悩みを聞くことがあります。心配しないでください。「わたしに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」(ローマ5・5)からです。16節にも「御霊により…内なる人を強くして下さるよう」とあるとおりです。御霊を注いでくださる神に祈り求め、示された導きに素直に従うことで、愛に生きる道を教えていただけるのです。

二、キリストの内住の恵み(17～19)

次に、「信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住む」という恵みです。現代社会では、個人の人權が重んじられ、個人的な自由が尊重されるようになりました。その結果、価値観の多様化が生じて来たのです。その上情報は限りなく多く、何に基準を置いて判断したらよいのか分からなくなってしまうのです。

悩みの多くは、無知よりも、選択の基準を見失った時に生じます。選択基準を信仰(神第一)に置くのが、クリスチャンの生き方です。常に信仰によって歩む者は、キリストを心の内に持つ生活をしているのです。「あなたがたがわたし(キリス

ト)につながっており、わたし(キリスト)の言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ15・7)とは、このことを指しているとも言えるでしょう。パウロが一番願ったこと、すなわち、クリスチャンの信仰生活において一番大切なことは、「キリストが心の内に住む」ことなのです。

三、愛に根ざし愛を基とする生活(17～19)

常にキリスト中心の生活では、神に隷属し自由は奪われ自己が失われると思う人がいます。これは、大きな誤解です。創造主なるキリストは私たちを個性的な存在として造られました。様々の能力と個性を具備した者が、すべての聖徒たちと共に、愛に根ざした生活を展開していく中で、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さを知る者としていただくのです。個性の違う者が、キリストの心を心として働く時、お互いの独自性を尊重しながら一致した答えに導かれることを経験します。その時、私たちは個人の能力をはるかに超えた可能性の扉が開かれた喜びに満たされるのです。今や、キリストの愛は、聖徒たちの愛の広がりとなつて、人知をはるかに超えていくのです。

結論

キリストの内住の恵みは、私たちにキリストの愛を知らせ、愛に根ざした聖徒たちの交わりは、お互いの個性を生かし合つて、個人の限界を超え、新しい可能性を生み出していくようになります。

研究資料

(井上)

エペソ人への手紙は、パウロがローマで捕らえられていた時の獄中書簡の一つである。エペソは古来、小アジアの中心都市であった。パウロは第三次伝道旅行でこの地を初めて訪れる(使徒19章参照)。エペソは政治、経済の中心のみならず、広大なアルテミス神殿があり偶像崇拜の中心地でもあった。パウロは困難にも関わらず、エペソの地の宣教を重要視し、力を注いだ(1コリント16:8-9)。エペソ人への手紙の主題は「神の奥義なる教会」(小島伊助師)である。前半1-3章は教理と神学、後半4-6章は実践と生活という、パウロ書簡の特徴が良く出ている。本聖書箇所は、教会についての教理的部分の締めくくりとして、普遍的教会への祈りをもって閉じられている。

テキスト

14 こういうわけで 教会とは何かという教理が記されてきたことまでの記述を踏まえて、という意味である。教会とは何かというパウロの論旨は、キリストの体である教会へとすべての人が導かれ、主にあつて一つにされるということである。**ひざをかがめて** ユダヤ人の祈りの姿勢は、ひざまずくことも、ひれ伏すこともあつたが、通例は立つて祈っていた。パウロは、熱心に心を注ぎだす祈りとして、立つことも座することもできず、全能なる神の前に身をかがめて祈る。

15 天上にあり地上にあつて 天上にあるとは、目には見えないが天にある、すでに召された者の集まりである凱旋(がいてん)的な教会である。地上にあるとは、現在私たちも属している、目に見える、地に

あつて戦う教会である。さらに、やがて救いに与る者も含まれる普遍的な教会と言えよう。**あらゆるもの**(**の**)**バス、あらゆる** 文脈から普遍的な教会を示す、すべての家族と訳される場合が多い。先に記したように、歴史、地域を超えたすべてのクリスチャンを含む普遍的な教会を表している。

16 内なる人を強くして下さるように 14-15節は祈りの序文、前置きと言える。16節からが祈りの本文となる。パウロが全クリスチャンに祈り求める第一の事柄は、内なる人が強められることであつた。パウロは、人間の外形であり肉体である外なる人と対比して、内なる人という言葉を用いている。内なる人とは単なる内面、精神だけではない。人間のもつとも内奥にある霊的な部分にまで及ぶ。**御霊により、力をもって** 内面や精神ならば人間的な力で強めることもできるが、内なる人は聖霊によって強められる。聖霊は、実際の具體的な力を与え、人を神に生きるものとする。

17 信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み パウロが全クリスチャンに祈り求める第二の事柄は、イエスの内住である。内容が似ていることから、しばしばエペソ人への手紙とコロサイ人への手紙は比較される。コロサイ1:27では、「この奥義は、あなたがたのうちにいますキリスト」と記されている。イエスの内住を受けるために、信仰がその扉を開くのである。**愛に根ざし、愛を基として** パウロは、クリスチャンがイエスの内住を具体的に表すのは愛であることを示している。根ざす(**の**)**リゾー**は植物に用いられ、基とする(**の**)**セメリオー**は建築に用いられる語である。愛こそ

は私たちが根を張る土壌であり、揺るがない土台である。そして、養われ立て上げられていく。

18 広さ、長さ、高さ、深さ この広さ、長さ、高さ、深さは何に關しての言及なのかは議論されてきた。イエスの…、教会の…、神の奥義の…、神の知恵と知識の…、などが考えられている。もっとも素直に当てはまるのは、イエスの愛の広さ、長さ、高さ、深さを、と理解することである。

19 神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように 満ちるは有名なプレローマであり、ヘブル語のシャロームに当たる。欠けるところがないとの意がある。人間は有限であり、不完全である。そのような者が神の完全を満たし、表すことはできない。イエスが内に住まわれるなら神ご自身は私たちの内に満ちあふれる。

20 わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができ パウロは最後に**栄光**とも言うべきしめくくりをもってこの祈りを閉じている。私たちの求め、祈りは部分的なものに過ぎない。神は私たちの十分な祈りをも越えて、生きて働いてくださる。

21 教会により、また、イエス・キリストによって 地上の教会はさまざまな戦いの中にある。悪の力とも、私たち自身の罪や弱さとも戦わねばならない。イエスによって栄光が表され続けるのは当然であるが、欠けだらけに見える教会によって栄光が表される。栄光を求めて励もう。

参考図書

「New International Commentary on The New Testament」(Erdmans) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句

エペソ3・14、21
内住のキリスト
信仰によって、キリストが、あなたがたの心のうちに住み、
エペソ3・17
主キリストの内住信仰により、
キリストの豊かな愛を知ろう。

目 標

導入

(和田)

先週は、「古い私をイエス様と共に十字架につけて、イエス様を心に主としてお迎えする」という、すばらしい恵みにあずかりましたね。さて、今週は、内に生きていくださるイエス様によって与えられる恵みをさらに学びましょうね。イエス様が内に生きていくださるのですから、もう、すつこく大きな祝福があるに違いない！ っと思うでしょう？ そのとおり！

内なる人が強くされる

「ねえ、見て見て！ ぼく、鉄棒に15秒もぶら下がれるようになったよ！」「わたし、腕立て伏せ10回できた！」。みんなの体がどんどん強くなっているね。体のことを「外なる人」って呼びます。外の反対は内。「内なる人」って。みんなには体があるけれど、それだけ？ いいえ、「心」があるでしょう？ としてもっと奥の内側に「霊」があるのです。心や霊の部分が「内なる人」ですね。「外なる人」は自分で鍛える方法がいくつもありますよね。でも、「内なる人」を自分で強くする方法は、なんと、一つもありません。それができるのは聖霊なる神様だけなのです。罪の力、悪魔の力に簡単に負けてしまう人。誘惑にたちまち負けちゃって、悪いとわかっているのにやっちゃう人。「やだな」っと思う人をどうしてもゆるせない、愛せないっていう人、いませ

んか？ どんなに自分の力で罪の力に勝とうとしても、また、自分の頑張りで、愛せない人を愛そうとしても、無駄なこと。でも、あれれ？ 「内なる人」が強くなっている！ 聖霊によるならば、ほら、罪の力に勝てるのです。聖霊が私たちに、愛することが出来る力をも注いでくださるのです。

イエス様が内に住んでくださる

「イエス様が私の内に生きてくださるってほんとにすごい！ でも、世界中の人たちを愛して、大切に思ってくださいるイエス様だから、お忙しいよね、きつとだからずっと一緒になんてきつと無理だよ、いつも共にいてください、なんてぜいたくだよね。」そう思っているなら、ご安心を！ イエス様は、信じる私たちの内にしつかり「住んでくださる」のです。イエス様がいつも一緒！ だから、「うくん、どうしようかな」っって迷うときも、自分がどうしたいか、ではなくて、「イエス様ならどうされるかな？ イエス様はどう思われるかな？」っって考えて、祈って決めれば良いのです。「イエス様の思いなんてわかんない」かな？ 大丈夫、イエス様が内に住んでいてくださるから、導いてくださいますよ。み言葉を心に蓄え、「イエス様を信じて従います。だからお教えください」という思いでお祈りしてみてください。ただし、「神様の御心が一番。イエス様が一番！」っっていう信仰で祈ってね。

イエス様の愛の大きさを体験できる

イエス様が内に住んでいてくださるので、私たちの心と霊の栄養は「イエス様の愛」からどんどんいだけます。ちょうど、お花の根が栄養たっぷりの土から豊かに養分を吸い上げてぐんぐん成長していくように、私たちもまっすぐきよらかに伸び続けていくことができるのです！ そして、大切な人生の土台がイエス様の愛だから、こんなに確かな土台は

他に絶対にありません。その愛ゆえに、いろいろな出来事の中でも簡単にはゆるぎません！

さらに、「神の家族」である教会のみんな、イエス様を信じる世界中のみんなと一緒に、イエス様の愛がどんなに広く深いかを体験していけるのですよ。それは、私たちが「こんなふうかな」っって考えるよりもはるかにすごい愛！ なのです。

例話

昨年、天に召されたN先生が、昔、インドから来られた先生からこんなお話を聞かれたそうです。「ある時、イエス様がインドに来てくださいました。そして、ある一軒のお家に入ってくださいました。お家の人はみんな大喜び！ でも、イエス様が部屋の戸を開けて入ろうとされるので、「いや、そこはまだ片付いていませんから」と断ったのです。次の部屋も、その次の部屋も……。とうとうイエス様が、『もうわたしに任せなさい』とおっしゃって、グツと戸を開けて部屋にお入りになったのです。本当に散らかっていた部屋でした。けれども、イエス様が中に入られると、その中のいつさいの汚れがサツと洗われて、輝くばかりの栄光の中にきよい、麗しい部屋になったのです。そこまでお聞きになってN先生は、それが例え話だとわかったのですが、「これは聖書の真理です。イエス様を、あなたの心の中に、信仰をもってお迎えするならば、あなたの心は今日、きよくしていただけるのです」とおっしゃいました。

まとめ

もしまだ、イエス様を心に迎えていないなら、今日お迎えしましょうね。イエス様があなたの内に住んでくださり、イエス様のすばらしい愛であなをいっぱい満たしてくださいませ！
♪主のパワー♪ (ふくいんこどもさんびか2・36)



聖書 ローマ8・18～30 テーマ 待望の祈り

序論

(水川)

罪を赦され救われた私たちは、聖霊によって生きる新しい生活に入りました。神の子(神の相続人)キリストと共同の相続人である、と17節までに明らかにされました。さらに教理上の救いの姿と、クリスチャンの現実との矛盾に答えたのが、本日のみ言葉です。それは栄化の恵みです。キリストの再臨に伴う救いの約束なのです。

一、現在への苦難と将来への希望(18～22)

〈この時〉とは「カイロス」で、「現在」のことです。現在、救われている私たちに苦難があります。私たちだけではなく、自然界、被造物すべてが悩んでいるのです。アダムが罪を犯した時以来、祝福された自然界の秩序が乱されて、宇宙全体が汚染されてしまったのです。人類が発生させてしまったCO₂による地球温暖化が、自然環境に異変をもたらしているように、私たちは環境と無関係にはおれません。また過去の歴史の中で犯した罪の責任も担うお互いです。〈実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている〉のです。では、このうめきから救われる道はないのでしょうか。あります。それはキリストの十字架によるあがないの救いなのです。「彼(イエス・キリスト)は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物

である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである」(1ヨハネ2・2)。神は私たちを救い、永遠の命を賜ったのみか宇宙万物をも、十字架によってあがなつてくださったのです。この自然界は今うめいているけれど、やがて神の子と共に、神の栄光に入る時が来ると、パウロは壮大な救いのビジョンを明らかにしてくれました。

二、神の子の待望(23～25)

キリストの十字架によるあがないの恵みに与った私たちですが、私たちの内にはどうにもならないうめきがあります。パウロは「心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」と言いました。またパウロは「肉体を宿としている間は主から離れていることを、よく知っている」(IIコリント5・6)と言いました。信仰で生きる者の現実を、美化することなく認めています。この現実の中で、〈からだのあがなわれることを待ち望んでいる〉のです。この体さえもあがなわれて二度と罪を犯さず、この肉体が変えられて栄光の体になり、神と共にいることが現実となる、その日を待ち望んでいるのです。〈御霊の最初の実を持つているわたしたち〉です。「この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至る」(エペソ1・14)ことができるのです。

クリスチャンは、すでに神の子とされています。

しかし、本当の完成はまだもたらされてはいません。やがての完成を求めるうめきを持っているのです。やがての完成を待望する、この望みによって救われているのが、私たちなのです。

三、望みにより救われている私たち(26～30)

望みに生きる私たちに、内住してくださる御霊は、弱い私たちを助けてくださいます。どう祈ったら良いかも分からない私たちに對して、とりなしてくださるのです(26)。私たちは一人ではありません。神が遣わしてくださる御霊は、私たちの現実を共にうめき、解決の道を探ってくださいなのです。私たちの弱さゆえ涙したことさえも、益になるように逆転してくださるのです(28)。しかも、ただの逆転ではなく、御子のかたちに似たもの(御子のかたちと同じ姿・新改訳)に、導いてくださる(29)のです。私たちが切実に祈ったとしても、それは所詮罪人の祈りです。ところが、そんな祈りが神に聞き届けられ、何度、栄光を拝したことでしょうか。御霊のとりなしによって、神は罪人の祈りさえも受け入れてくださり、私たちの思い願いに優った応答をくださり、私たちは何度感謝したことでしょうか。

結論

救われた私たちに弱さがあります。しかし、キリストの十字架のあがないの恵みは、再臨の時、私たちを完全な者に変え栄化してくださいます。私たちは、この希望によって救われているのです。

研究資料

(井上)

2月7日の研究資料に記したように、ローマ人への手紙6〜8章は聖化論についての記述である。行いの罪の赦しのみならず、罪を犯させる根本の性質さえも神はきよめてくださる。きよめに与った者は、やがて栄光の体に変えられる栄化の希望を持つ。8章は、聖化からさらに栄化への導きが記されている。

テキスト

18 今のこの時の苦しみ イエスの十字架のあがないを信じ救われた者は、苦難が無くなるのではない。すぐ手前の17節では「キリストと：苦難をも共にしている」と記されている。信仰者が苦しみにあうことは否定されてはいない。むしろキリストのゆえに苦難を受ける者である。**やがてわたしたちに現されようとする栄光** 現在、天に帰られ、目に見えないイエスは、再び地上に來られる。信仰を堅く持った者は、イエスと共にその栄光に与ることができる。

19 被造物 (〔P〕クティシス) 神が創造された自然界すべてのものを指している。ここでは擬人化された表現がなされている。被造物もうめき、苦しみながら主が再び來られ、永遠にいたる新たな創造がなされるのを待ち望んでいる。

20 被造物が虚無に服した 虚無(〔P〕マタイオテス)という語は、ギリシャ語訳旧約聖書では伝道の書の「空、空の空」に当てはめられている。アダムとエバが罪を犯して、創造の秩序を破壊した。それ以来、自然界も空しさの中にある。

23 御霊の最初の実 イエスは十字架であがないの死をとげられた。イエスを救い主と信じる者は、聖霊による霊的な実である。初穂の実とも訳されるが、初穂は本格的な収穫の先がけである。さらに豊かで大きい神の恵みが、聖霊に与る者たちに約束されている。**子たる身分が授けられること、すなわち、からだのあがなわれること** イエスの十字架のあがないによつて、救いを信じた者には子たる身分が授けられている。魂はあがなわれ、すでに神の子とされているが、肉体は弱さのあるままである。イエスが再び來られる時から始まる終末には、私たちの不完全で滅びる肉体は、完全で永遠に至る栄光の体に変えられるのである(Ⅱコリント3・18)。

24 わたしたちは、この望みによつて救われているのである パウロは先に、本書5・2で終末を見すえて、「神の栄光にあずかる希望をもつて喜んでいる」と記している。さらに続く5・3〜5には、神から与えられる希望は失望に終わらないことが、強く語られている。永遠にいたる望みが信じる者に与えられている。**目に見える望みは望みではない** 目に見えることに信仰は必要ない。信仰を定義するヘブル11・1でも、「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」と述べられている。

26 御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる 聖霊は助け主としてこの世に來てくださっている(ヨハネ14・16)。**わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さる** 聖霊の助けは具

体的に祈りに表される。言葉に表すことのできる求めは、まだ浅く軽いものである。言葉に表せず、うめくほどの深く、重い求めを、人は持つことがある(サムエル上1・13、ハンナの祈り)。聖霊は人と神の間に立つて、人の言いがたい深い思いを、うめきをもって届けてくださる。

28 神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている ローマ人への手紙を読み進めると、義認、聖化、栄化の救いの全貌が明らかにされていく。8章もここに至つて、最終節に向かつて大団円を迎える。原文では、知っている(〔P〕ホイダメン)が最初に出てくる。パウロの神様の真実を伝えたいという熱い思いが伝わってくる。神は信じる者にご計画を持つて臨まれる。この世は、運命論、不可知論を説くが、信仰者には神のご計画があり、神はすべてを益に導かれる。神の不變の愛に委ねることのできる平安に立つことができる。

29 御子のかたちに似たものとしようとして 神のご計画は、信じる者がイエスに似るものとなることである。さらに信じる者を、イエスを長兄とする兄弟とみなしてくださるのである。**30 あらかじめ定められた者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下さった** 神のご計画と導きは、この世の歩みのみならず永遠の栄光に至らせる。

参考図書

『New International

Commentary on The New Testament』(Eerdmans) 他

聖書 ローマ8・18～30
 タイトル 待望の祈り
 暗唱聖句 からだのあがなわれることを待ち望んでいる。 ローマ8・23
 目 標 からだの復活の希望に生きよう。

導入 (和田)

「があゝつはつはつはあゝ！」って、おなかの底から笑ったこと、ありますか？もう、こんなにうれしくって、楽しくってたまらないことはない！ってこと。でも、反対に、こんなに苦しくてつらくって悲しいことは他にない…そんなときは、声にもならない、心の奥底からの「う、う、う」ってというような声が思わず出ちゃうんですよね。それは「うめき」っていうんです。そんな「うめき」さえ、喜びの叫びに変わるとしたら、本当に幸せですよ！出来るんです、イエス様なら、うめきを喜びに変えることが！

世界中みんなのうめき

人はどんなとき、うめくのでしょうか。けがや病気のとき、いじわるされたとき、わかってもらえなくてつらいとき、家族やお友だちが死んでしまったとき…。この世界には、苦しみや悲しみがたくさんありますよね。イエス様を信じたらもう苦しみはなくなる？いいえ、クリスチャンにも苦しみや悲しみは襲ってきます。ときには、クリスチャンだからこそ苦しめられるってことさえあるんです。いや、人間だけじゃないんです。動物たちや植物たちも、病気や死の苦しみにうめいてい

るって聖書に書いてあるんですよ。空しさに閉じ込められたまいうめいているんです。その元をたどれば、なんと、人間の罪！アダムとエバが神様に背いた瞬間から、自然界も空しさの中に捕らえられて、うめき続けているのです。ああ、恐ろしい！人間の罪ってなんて醜いのでしょうか。

からだの復活の希望

でもね、素晴らしいニュースがあるんです。私たちの罪は、イエス様が十字架にかかって全部引き受けてくださり、赦されたでしょう？だから、イエス様を信じる私たちの魂は、イエス様の血という代価で買い取られて神様のものとなり、すでに神様の子という身分が与えられたのです。でも、まだ、この体は罪の力から完全に自由にされてはいません。まだ弱さを持ったままです。それが全く新しい体に変えられる「復活」の時が必ず来るんです！それは「栄光のからだ」といって、二度と罪を犯すことなく、病気やけがの心配もなく、死ぬこともない、永遠に変わらない素晴らしい体なんです！「ええ？いついつ？早くそんな時が来てほしい！」って思いますよね。それは、今、天におられるイエス様が、やがてもう一度来られる「再臨」のとき！「再臨」のことは来月じっくり学ぼうね。その日には自然界も含めて全世界が全く新しくされるのです。ハレルヤ！

「すごい！でも、ぼくなんて、私なんて無理かも」って思っていますか？実は、体の復活という恵みは、イエス様を信じていれば必ず与えられるのです。だって、イエス様を信じるすべての人に与えられている「聖霊」こそ、体の復活が絶対に与

えられるっていうしるし（保証）なんですよ。なんだか希望でワクワクしてきますね！

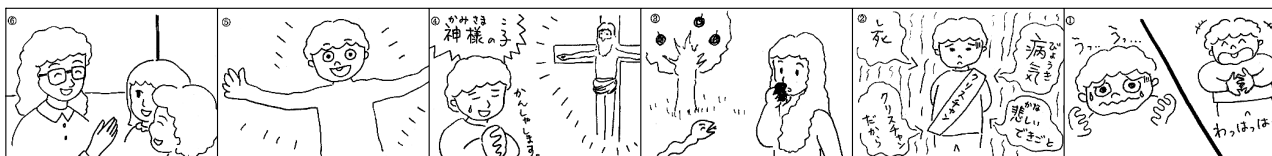
うめきは喜びに

それだけではありません。全世界のうめきをやがて復活の喜びに変えてくださる神様は、今の私たちのどんな悲しみ、苦しみ、痛みから来るうめきをも、喜びに変えることができるのです。イエス様を信じていれば、すべてのことは益（プラス）となる…そう、どんなに「チヨ―最悪！」ってことが起こっても、それを、あたかもなくてはならなかったかのようにはプラスに変えることができる、それが神様なのです！しかも、つらくてうめいている私たちと一緒にうめくようにして、祈りにならない思いもちやんと父なる神様に届けてくださるのが、聖霊なる神様のお働きなのです。「お祈りしたいのだけれど、どんなふうに祈ったらいいかわかんない…」そんな弱さがだれにでもあります。そこに聖霊なる神様が届いてくださって、私たちの願いに優る素晴らしい答えをくださるのですよ！嘘だと思ったら、先生たちを捕まえて、尋ねてみて！きつと、「こんな風にお祈りに応えてくれたよ」って教えてくれるから。

まとめ

「魂が救われるのはわかるけど、この体はどうなっちゃうのかな？」って思っていたお友だち…。イエス様があなたのために十字架にかかって死に、死を打ち破って復活されたのですから、あなたはやがて体の復活の恵みをいただいで、永遠に神様と共に生きるのですよ。この希望を胸に、さあ、ますますイエス様に従おう！

♪天国への道♪（ふくいんこどもさんびか2・11）



聖書 ヨハネ14・1-7

テーマ 父の家の希望

序論

(福井)

13章から17章は、イエスが十字架にかかられる前になされた最後の語りかけである。これは普通、弟子たちへの「告別説教」と呼ばれるものである。この14章においては、天国と聖霊についての説き明かしがなされているが、どちらもキリスト教信仰の根幹にかかわる重要な部分である。それは、弟子たちの不安と恐れに対して、彼らを励まし力づけ、信仰が保たれるためであった。

一、心を騒がすな

その時、イエスに対するユダヤ人（特に指導者たち）の反感と敵意、憎悪の念が殺意にまで達していた（5・18、11・53）。そのためイエスの弟子たちも心が騒ぎ、重苦しい不安と恐れの中にあった。しかも彼らは、仲間の弟子の中から主を裏切る者が出ることを、イエスから聞かされた（13・21）。さらには、ペテロの失態の予告（13・36、38）と、師と仰ぎつつ従ってきたイエスご自身が、彼らのものを去って行かれることも聞かされたのである（13・33）。これらのため弟子たちはショックを受け、動揺し、不安、心配、恐れのために、心が騒いでいた。そのような彼らに対して、主は「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われ、慰めと励ましを与えられた。心を騒がせ、動揺することは失敗、敗北への第一歩である。そのことから守られ、不安と恐れ

からの救いとそれに勝利するために、神を信じ、イエスを信じることを勧められたのである。

二、天国について

イエスが弟子たちから去って行くことは、実は彼らのためであった。イエスは、弟子たちが神と共にいつまでも住み、神を永遠に喜ぶことのできる道を開くために去って行かれるのである（2）。イエスはまず天国を「わたしの父の家」と表現された。天国、それは神の家であり、そこには神の臨在があり、神こそがその所有者、その支配者である。神の臨在、その監督のもとに、神の御心が常に完全な形で遂行される、これが「わたしの父の家」と表現された天国である。

続いてイエスは天国は「すまい」であると言われた。「すまい」には「モナイ」というギリシヤ語が使われ、生活する場所を意味する。そこは一日の労苦から解放され、十分な休息、くつろぎ、安らぎを得ながら、生活するところである。すなわち、天国は一切の労苦から私たちを解放し、満ち満ちた休息、憩いを提供するところである。イエスは、天国が「あなたがたのため」であり、

「場所を用意しに行く」と言われたように、私たちのための場所であり、イエスによって備えられる場所であると教えられる。そこは地上のような主との別離は全くないところで、私たちをそこに迎え入れるためにイエスが再びこの地上に来られるのである。

三、天国への道

そこで、イエスは弟子たちに「わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかつている」と言われた。主はどういうお方で、これからどういうことをしようとしているのか、繰り返し教えられてきたからである。十字架にかかつて死に、3日目に復活して、天に帰られる。そして天に帰られたら、弟子たちのためにそのすまいを用意して、また迎えに来るということである。

しかし、これを聞いたトマスは、よく理解できず、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません」と質問をした。すると、イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことができない」と答えられた。イエスはご自分のみが、一切の解決者であり、救い主であること、父のみもと（天国）への唯一の道であると宣言されたのである。

人類は罪のために真理を見失って、永遠の滅びに至る人生を歩んでいる。罪人は、イエスを通してでなければ、だれ一人、父なる神のみもと（天国）に行くことができないのである。

結論

イエスは心を騒がせ、動揺し、不安と恐れの中にある弟子たちに、天国で主と共に住むという希望と喜びを説き明かされた。さらに、その準備が完了した時に彼らを迎えに来ると約束された（3）。このイエスの約束は、弟子たちに大きな希望と勇気を与え、彼らを大胆な信仰者へと変えていったのである。

研究資料

(宮澤)

週題として「父の家の希望」が与えられている。イエスの死が弟子たちに不安と失望を抱かせることを悟った主イエスは、自らの死が何を意味するのかを明確に語る必要に迫られた。それは弟子たちに希望を与えるものであり、その希望のゆえに信仰に堅く立つようにと弟子たちに語った。中心聖句が1節であるので、1節を中心に取り扱う。

テキスト

1 あなたがたは、心を騒がせないがよい 「心を騒がせる」という言葉は、直訳すれば、心がかき乱されるということである。「騒がせる」というギリシャ語は、他の箇所では「不安になる」「惑わす」「おびえる」「うろたえる」等、様々に訳される。

しかし、弟子たちは、なぜ「心を騒がせて」といるのだろうか。弟子たちの身に置き換えて思いを巡らしてみても、また私たちに与っては必要なことである。ある注解者は、差し迫ったイエスの死が、弟子たちの心に大きな不安と動揺をもたらせたのではないかと語る。すなわち師との決別である。しかし別の注解者はそれよりもイエスの死を彼の敗北の結果ととらえたために、それが彼らに挫折感を与えたゆえではないかと述べる。

神を信じ、またわたしを信じなさい 神を信じるということとは、何か超越的な存在として心の中の神の姿に手を合わせるのではなく、十字架にかかって死なれ、よみがえられた主イエス・キリストを信じることである。同時にこの宣言は、神に対する信仰とイエスに対する信仰とを同列におく、

極めて重要な意味を持つ宣言である。

2 すまい 「マンション（大豪邸）」(NIV)。主が私たちのために天にて備えられる住まいは、大豪邸であり、その大豪邸を備えに行くことがキリスト昇天の目的の一つである。**あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから** イエスの死にどのような積極的な意味があるのかを示す重要な言葉である。イエスの十字架の死とは、地的にはイエスの無惨な敗北の死である。しかし天的にはイエスは父なる神の御許にお歸りになり、そこで彼を信じる人々を迎え入れるための準備をなさるのである。

3 そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう この箇所は、多くの解釈ではキリストの再臨を指すものと考えられる。しかし、18節との関連から、後の聖霊降臨を指す解釈も可能であるし、また現在私たちとともに住まわれるという理解にも立つことができる(23)。**わたしのおる所にあるあなたがたもおらせるためである** わたしのおる所とは、天国のことである。天国とは、神の恵みの支配を指す言葉である。それゆえ天国とは、単純に死後の世界のことではなく、現在神の恵みの支配のただ中にあることである。

4 イエスはかつて弟子たちに「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、わたしをおつかわしになったかたのみもとに行く」(？・33)と語られた。そればかりでなく、主は弟子たちに繰り返しご自分がどこへ行かれるかを語ってきた。しかし、弟子たちはついに理解することができなかつたのである。

5 道 トマスはこの言葉を、ある場所を指す言葉として理解したのであろう。

6 わたしは道であり、真理であり、命である 前節において「道」を物理的・空間的に理解したトマスに対して、主イエスこそが父の家に達する道であり、ご自身の十字架の贖いと仲保において、神の命にあずかる道を開いてくださったことを示す。そして、自らが「真理」であるとは、イエスご自身が神について、また神と人についての「真理」そのものであり、すべての知識の源は、主を知ることであることを示す。そして、自らが「命」であるとは、イエスご自身がすべての命の根であり、永遠の命の与え主であることを示す。**だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない** 主は私たちの天の父に至る唯一の道なのである。キリストを拒絶する時、人はすべてを失う。しかし「父のみもとに行くこと」は、ただ終わりの時のことではない。今この人生において、親密な関係のもとで平安と慰めを得るために父の御許へ行く道でもある。

7 すでに父を見たのである この箇所に至って、主と弟子たちとの問答は再びピークに達する。当時、ギリシャ人にとって、神は見えない存在であった。また、ユダヤ人にとって、神は見るものの出来ない存在であった。しかし、イエスは「わたしを見た者は、父を見たのである」と、いとも簡単に語るのである。ピリポはこの主の言葉が理解できなかった(8節以下)。

参考図書 B・F・バックストン「ヨハネ傳講義」(バックストン記念霊交会)、他

聖書
タイトル
暗唱聖句ヨハネ14・1〜7
父の家の希望

あなたがたは、心を騒がせない

がよい。神を信じ、またわたし

を信じなさい。ヨハネ14・1

目 標

天に備えられた住まいを思い、
堅く神様を信じよう。

導入

(和田)

パンバカバーン！さあ、マラソン大会、いよいよスタートです。ヨーイ、ドン！「ねえねえ」「ん？」「あのさあ、このマラソン、ゴールはどこ？」「あれれ、そう言えばどこだっけ？わかんない。」「がっくり」なんてこと、ありませんよね。私たちの人生は、一回限りの大切なマラソンみたいなもの。ゴールがはつきり分からないのに、走れませんか。大丈夫！イエス様がちゃんと教えてくださっていますよ。

心配しなくて大丈夫

「こわいなく、しんばいだなく、どうなっちゃうんだろう…」って、心がざわざわすること、ありませんか？イエス様の弟子たちの心は、その時、心配や恐れでいっぱいでした。だって、大好きなイエス様が、もうすぐいなくなっちゃうって言うんですから。しかも、十字架にかかって死んでしまう！ええ？イエス様が悪いことをした人といっしょにされて殺される？そんなあ〜。でも、イエス様はおっしゃいましたよ。「あなたがたは、心を騒がせないがよい」。そう、「心配しなくて大丈夫！父なる神様を信じなさい。そして、わたしを信じるのです」と。だって、イエス様が死んじゃ

うのは、それですべてが終わってしまうのでもなく、イエス様が悪の力に負けちゃうのでもなく、むしろ、弟子たちにとっても、私たちにとっても、すばらしい祝福なのですから。

わたしの父の家、あなたがたのために

実はね、イエス様が十字架で死なれるのは、死を打ち破ってよみがえり、罪の力を砕き、そして、父なる神様のもとにお帰りになり、やがて、イエス様を救い主として信じるすべての人々を天国に迎えてくださるためなのです。イエス様は天国を「わたしの父の家」とおっしゃいました。父なる神様の大きな愛が満ちあふれるところ、もう、心配なことや、嫌なこと、不安なこと、けがや病気もいっさいない、やがて死んじゃうっていう恐怖もない、本当の平安に満ちあふれた最高の場所です！そこに私たちのために準備してくださる住まいは、小さなお家でしょうか？それでもうれしいよね。でも実は大豪邸、つまり、ちよー大きな広いお家なんですって！「あなたがたのために、用意に行くのだよ。迎える準備が出来たら、また来るんだよ」って。やったー！弟子たちの目もきらきら輝いたかな？うーん、聖書を読むと、残念ながら弟子たちはぴんとこなかったみたい…。

わたしが道

そこで、イエス様はおっしゃいました。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」。そうです、イエス様だけが父のみもとにつながるたった一本の道なのです。本当なら、罪のために天国へは行けないで滅びるはずの私たちが、イエス様を信じていけば、すべての罪は

ゆるされ、天国に行けるのですね。そしてそこだけが、私たちの目指すべきゴールなのです。しかも、天国って、死んでしまっただけじゃ行けない場所なのではありません。今、この人生のマラソンコースを、ずっとイエス様が一緒に走ってくれるのですから、いつも天国なのです！イエス様のいらっしやるどころ、つまり、あなたの心の中が、もう天国なのです。

例話

アフリカ旅行でジャングルに奥深く入って行った人のお話です。彼が雇ったガイドは先に立って、背の高い草を倒しながら進んでいます。あまりにも暑くて疲れてへとへと。いらいらしてガイドに尋ねました。「ここはどこなんだ？私をどこへ連れて行くところなのか、ちゃんと分かっているんだろ？うね？いったい、どこに道があるんだ？」ベテランのガイドは足を止め、振り返って言いました。「私が道です」。私たちも、時々同じような質問を神様にしちゃうかも。「神様、どうなっちゃうんの？ほんとにあなたに従っていい大丈夫でしょうか？」そんな不安なときや怖いとき、思い出しましょう。イエス様が道です！イエス様についていけば、ぜったいの絶対に大丈夫！

まとめ

イエス様を信じているのに、天国のこと、あんまりわかんなかった、というお友だち…。あなたは天国に向かってまっすぐ進むのです。イエス様と一緒に！だから、心が不安や心配であふれそうになっても大丈夫。天国の希望をしつかり持つてイエス様に祈ろう。心は天国の喜びであふれますよ！
♪ワン・ウェイ♪(ふくいんこどもさんびか2・10)



聖書 II ペテロ3・8～18 テーマ 再臨に備える

序論

(福井)

「終末論」は「世の終わりの一連の出来事」、すなわち、イエス・キリストの再臨に始まって、御国の完成に至る世の終わりの出来事について教えている。ところが、ペテロの時代には、すでに偽教師が活動し、現代と同様に、キリストの来臨（再臨）に関する信仰を揺さぶっていた。そのような状況の中で、主の来臨についてペテロが教えたのが、この箇所である。

一、主の来臨の遅延

「なぜ主は、キリストの再臨を遅くされるのか」との質問に対して、ペテロは四重の答えを出している。遅延は、①神が永遠に存在される証拠である。神は時間によって制限も支配もされない。神と人間では時間の数え方が異なっているのである（8b）。②神の言葉の撤回を意味するものではない。主は、その目的について、遅らせておられる（怠慢になっておられる）のではないからである（9a）。③神が忍耐しておられることを意味する。罪のために滅ぼされるべき人間が一人も滅びず、悔い改めることを望んでおられるからである（9b）。④神の言葉の否定を意味しない。主の日は必ずやってくるからである（10）。

主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。だから、主は定められた日

より一日でも「早く」来られることはないが、そのことはいつでも「すぐ」なのである。その（主の日は盗人のように）やって来るが、その時には、天は大音響をたてて消え去り、天の万象と地上のものは焼け、崩れ去る。その滅亡をとおして新天地が創造され、そこは義が永遠の住みかとするところとなる（7、10、12～13）。

二、再臨への備え

主の日が来ることの確かさを示したペテロは、次に再臨についての備えを語る。

①「聖い生き方をする敬虔な人」（11、新改訳）になるように。きよい主に会う備えをする者がきよい生き方をする以上にふさわしいことはない（1ペテロ1・15）。②神の日を待ち望むように（3・12～13）。再臨の信仰に立たない者は、再臨のことに無頓着で、刹那的、虚無的な生き方をする。③主の日の到来は主の主権に属することであるが、クリスチャンもその到来を早めるようにすべきである。「そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません」（12、新改訳）。〈主の日〉に成就する御国は、クリスチャンの心に聖霊によってすでに到来しているが、究極的には再臨によって完全に成就する。その成就のために祈り（マタイ6・10）、また福音宣教によって、それを早めるべきである（マタイ24・14）。

神の約束を信じるクリスチャンは、この天と地は崩れても新天地に入る希望があり、そこで、私たちは御父と御子と共に永遠に住むのである。

そのことを思うだけで心が躍る。

三、主の来臨に対する勧告

キリストを知り、その来臨を待ち望んでいる者に対して、これまでの勧めを要約して、それにふさわしい実を豊かに結ぶように勧めている。

①血の注ぎを受け、御霊のきよめにあずかり（1ペテロ1・2）、きよい生活を送ることは主の再臨の希望に生きる者にふさわしい（14）。②主の忍耐は人々の救いのためであることを覚え、福音宣教のわざに励むように（15）。主は私たちに、福音を伝える時間を与えておられること。私たちも主のあわれみと寛容によって救われたことをよく考えて、福音の証し人となることである。③パウロの手紙と、それに加えて聖書の他の箇所を学ぶように（15～16）。その学びは、さらに細かい注意と正確さによって学び、また適用することである。それは曲解して自分自身に滅びを招かないためである。④偽教師に誘われても自分自身の堅実さを保つように（17）。⑤「わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かに」なることである。そのためには、常に主イエスと交わり、深く主を霊的に知り成長することである。

結論

いつの時代にも偽教師がはびこり、教会もクリスチャンも、内外から揺さぶられる。しかし、神の忍耐を思い、キリストを知り、再臨の主にお会いするという明確な希望に燃えて信仰に生きよう。

研究資料

(宮澤)

本日の週題は「再臨に備える」である。キリストの再臨に対する考えや教えが入り乱れ、異端や偽教師が入り込む中で、ペテロは再臨に対する正しい態度と再臨を待ち望む姿勢を示す。

テキスト

8〜9 再臨の遅延の現象について、ペテロは、まず神の永遠性と人間の有限性を挙げて説明する。神は時間を超越されたお方であり、永遠に存在されるお方であることを指摘する。しかし、再臨の遅延についてはそのような神のご性質以上のものがあるという。それは神の忍耐と愛のゆえである。一日は千年のようであり、千年は一日のようである。詩篇90篇からの引用。「千年」は、現代の時間概念ではない。この言葉は、古代人にとっては「永遠」に近い無限の時間を意味した。

10 ここでは再臨の確実性が語られる。主の日終末論的表現で、旧約では神の裁きとイスラエルの救いの日であり、新約ではキリストの再臨と御国の完成の日であり、また救いの日として引用されている。主の日は来る。それは絶対確実である。それは不意に、盗人のように襲ってくる(マタイ24・43、1テサロニケ5・2、黙示録3・3)。11〜13 再臨の確実性が示されたので、その再臨を待ち望む信仰者の姿勢が問われる。この箇所は、特に口語訳聖書と他の邦訳聖書の表現の仕方が異なっている。他の翻訳の聖書もよく味わいたい。特に、熱心に待ち望むとは、再臨の到来を

早めることであると他の邦訳聖書は語っている(新改訳、新共同訳、永井訳他)。この言葉は「せき立てて催促する」という意味にも解釈できる言葉である。再臨がすぐにでも来るようにせき立てるということは、すなわち罪人たちが悔い改めて福音を信じるように、福音宣教に励むことである。ただ単なる内面の熱心さとは異なる。

14 ペテロは、再臨を待ち望むキリスト者の在り方として、しみもなくききずもなく、安らかな心で、神のみまにえられるように奨めをする。しみもなくききずもなくとは、2・13にある偽教師と対照的な生き方であり、何よりもキリストご自身が「ききずも、しみもない小羊のような」(1ペテロ1・19)方だからである。また、安らかな心(心シャローム)とは、「平静に」「仲良く」ということ以上に、神との正しい関係における贖われた者の安らぎを意味する。この安らかな心は、人間が造り出すことのできるものではなく、ただ神が与えてくださる平安である。

15 わたしたちの主の寛容は救いのためであるとは、9節の言い換えであり、特に他の邦訳の聖書は寛容を忍耐と訳していることを考えると、そのことはよりはつきりする。また、この箇所はペテロがパウロ書簡にも既に目を通し、また親しんでいることが推察できる。ペテロとパウロとは多少の対立があったこともあるが(ガラ2・11、14)、パウロへの愛と尊敬を込めて、わたしたちの愛する兄弟と呼んでいる。また自らとパウロの語っている言葉の起源を示すために、与えられた知恵と語る。この知恵とは単なる人間の知識や

能力ということではなく、神ご自身から与えられた知恵であり、神の奥義を知るための知恵である。

16 ペテロは更にパウロの手紙について引き起こされる問題点について語る。これらのこととは、前節(14、15節)の内容と、その背後にあるキリストの来臨についてのことであろう。無学で心の定まらない者、いわゆる学問的に知識のない人ではなく、「学ばざる人」(永井訳)であり、聖書を正しく学ぶことをしない人である。それゆえその人の状態は、心の定まらない状態、心の堅からざる者(永井訳)となるのであろう。ほかの聖書「聖書の他の箇所」(新改訳)という意。新約聖書一般では旧約聖書を指すことが多いのであるが、この箇所では、旧約聖書の他に、公認されつつあった新約聖書諸文書をも指す。神の御霊によらず、自分の知恵に従って、しかも故意にねじ曲げて解釈するような者の行き着く先は、滅亡である。

17〜18 愛する者たちよ と、ペテロはこの箇所において既に三度目の呼びかけをする(8、14)。非道の者とは、不道徳な者(新共同訳)、おきてを守らない人たち(フランシスコ会)のことを指す。あなたがた自身の確信を失うことのないようにとは、み言葉の真理のうちに自らを堅く立たせることである。その意味で、新共同訳は参考になる。更に積極的には、み言葉に堅く立つ生活とは、キリストを知る生活であり、その恵みに生きる生活なのである(18)。

参考図書 荒井献他監修「ギリシャ語新約聖書釈義辞典」(教文館) 他

聖書

Ⅱペテロ3・8～18

タイトル

再臨に備える

わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。

目 標

Ⅱペテロ3・13
神の忍耐を思い、目を覚まして新天新地を待ち望もう。

導入

(田上)

皆さんはコウタンということを聞いたことがあるでしょう？ イエス様が馬小屋にお生まれになったことを降誕といいます。ではフッカツということはどうでしょう？ 十字架で死なれたイエス様が墓に葬られ、その墓から甦よみがえられたことを復活と言います。このあたりまでは知っている人も多いと思います。ではもう一つ、サイリンとはどういうことでしょうか？ 今日、皆さんにこのサイリンという言葉と、その意味を覚えてもらいたいと思います。

再臨とは

イエス様がもう一度、来てくださるということ。それを再臨と言います。イエス様は、甦よみがえられた後、天に昇られました。そして天の父なる神様と共に、私たちを見守ってくださいます。そのイエス様がもう一度、この世界に来てくださるのが再臨です。では、それは何のためでしょうか？

今、私たちの生きている世界には、困ったことや悲しいことがたくさん起きています。このまま行くと、何もかもが破壊され、人類も滅んでしまふ世の終わりが来るのではないかとという人があります。

ます。「〇年〇月に世の終わりが来る」というおかしな予言を信じる人までいます。そして、「何をしてもムダだ」というような諦めあきらめの心に囚とらわれてしまふ人もいるのです。

聖書が伝えてくれている「世の終わり」には、確かに滅びとして受け止めなければならないことがあります。しかし、滅びでは終わらない。いや、世の終わりは、滅びではなくて、むしろ救いを迎える時なのです。

今この世は、いろんな困ったことや悲しいことが起つています。人間の努力では解決できないことがとてもたくさんあります。そういう世界に決着をつけてくださるために、イエス様はもう一度、来てくださるのです。そのとき「義の住む新しい天と新しい地」、つまり神様の国が完成するのです。もうそこには戦争はありません。罪に苦しめられる人もいません。神様の御心だけが行われる世界が実現するのです。

皆さんも主の祈りの中で「御国が来ますように」と祈るでしょう。その御国が、イエス様が来てくださることによって来るのです。

再臨を待ち望むとは

それならば、早くイエス様が来てくださるようにと願うでしょう。聖書が書かれた時代のクリスチャンも、イエス様の再臨を真剣に待っていたのです。そういうクリスチャンを見て、「いくら待っても、キリストは来ないじゃないか！」と悪口を言う人もありました。そんなふうになつていくなかで、「やっぱりイエス様が来ることはないのかなあ」と信じる心がぐらついてしまふ人もいました。そういう

う人たちに向けてペテロさんは、真剣になつて言うのです。「だが何と言おうと、私たちは神様の約束を信じよう！ 新しい天、新しい地を完成するために来られるイエス様を、喜んで待ち続けよう！」と。

(※ここは説教者自身も真剣に語りたいものです。)

「それならば、再臨はいつ起るのですか？」という質問をする人があるかもしれません。それはわからないのです。イエス様ご自身も知らないのです。再臨がいつ起るのかは、父なる神様だけが知つていらっしゃるのです。そうすると、いつイエス様が来てくださってもよいように、備える生活をしているということが大切になります。

皆さんの学校でも、春になると家庭訪問があるでしょう。〇日の午後、先生が来られる、という連絡が家に届きます。そうすると私が小学生だったときは、先生に見られても恥ずかしいようにと机の周りをきれいに片付けたものでした。子どもが片付けをしなくてもお母さんがいつもきれいに掃除をしておくということもあるでしょう。そして、家に来られた先生から、「きれいになってるね」と褒めてもらうとうれしいものです。ところが先生が帰ってしまった後、片付けをしなくなり、散らかったままにしておくということになると、これではおかしいでしょう？ 本当は、いつ先生に見られても恥ずかしいないように片付けておくべきです。家庭訪問と違って、イエス様が来られる日はわからないのです。ですから、そのイエス様にいつ見られてもかまわないような生活をする、それが再臨に備えるということなのです。

♪しんやぐせいしよのうた♪(こどもさんびか64)



聖書 黙示録22・12～21

テーマ 再臨の宣言

序論

(福井)

「わたしはすぐに来る」と主の再臨の宣言が二度なされている(12、20)。黙示録では五度なされていて、この箇所は7節の繰り返しである。その時、報いを携えてくるとも約束している(12)。そのために、この書の預言の言葉を守ること、聖なる生活を徹底することを訴え、「主イエスよ、きたりませ」(20)との応答が求められている。

一、イエスの語りかけ

「見よ、わたしはすぐに来る」との約束に加えて、キリストは仰せられる。「報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」。イエスは、聖徒と罪人の両方に、それぞれの結末に応じてさばかれ、正當に報われるのである。それは、彼が「アルパであり、オメガである」、すなわち神と同一のお方であるからである。

報いとは、キリストの血によってきよめられた者が、門を通って都に入り、「いのちの木にあずかる特権を与えられ」ることである。しかし、都に入れない者もいる(15)。それは都の中にいた者が外に出されるという意味でなく、もともと外にいたのである。

イエスは、「わたしは、ダビデの若枝また子孫」であると言われた。彼は、ダビデの家系の根であり、子孫であって、神の約束による救い主、預言者が預言したまことのメシヤである。また、イエ

スは「輝く明けの明星である」とも言われた。このイエスは明けの明星として輝いており、希望に輝く光となられた。キリストは神の日がやがて来ることを予告する明けの明星である。

二、御霊と花嫁の応答

「見よ、わたしはすぐに来る」(7、12)というキリストの声に対して、三つの口より応答があった。御霊と花嫁とヨハネである。御霊は預言者を通して語られる聖霊のことであり、花嫁は新婦なる教会を指している。御霊と花嫁は声を合わせて、「きたりませ」と応答した。ヨハネは、さらにこの書のメッセージを「聞く者、すなわち教会の一員となつてゐるすべての者も(きたりませ)」とキリストの再臨を求める祈りに加わるように勧告している。

しかしヨハネも教会も、キリストに会う備えのできていない人々のことを考えずに、キリストの再臨のことだけを考えることはできなかった。新しいエルサレムに入る希望の持てない人々のために心を痛めたヨハネは「かわいている者はここに来るがよい」と招いている。イエスは人々の最も奥深い必要を満たされるが、まず、その必要を覚えなければならぬ。渇きを覚えて、イエスのもとに来て、いのちの水を飲み(ヨハネ4・14)救いを受けることである。その時、人は、キリストの再臨に対して備えることができる。

三、最後の約束と祈り

18～19節はヨハネの言葉で、彼はこの書の教え

について、不謹慎に手を加えようとする試みに対し、厳かな警告を発している。何人も、これに加えるべきではなく、また、これを除き去るべきでない。敢えてこれを行う者があるとすれば、最も恐ろしい刑罰が課せられる。なぜなら、黙示録の記録は単なる記録ではなく、そこに預言があり、そして預言は必ず成就する。その意味では、黙示録は神の約束そのものである。

「これらのことをあかしするかた」、すなわち「わたしイエス」はこう仰せられる。「しかし、わたしはすぐに来る」。これが聖書の最後の約束である。「しかし」とは、神の約束が真実であることを示している。また、「来る」は「来つつある」を意味し、まだ到着はしていないが、すでに出発していることを意味している。これに対して、最後の祈りは、「(アアメン、主イエスよ、きたりませ)」である。「(アアメン)」とは、主イエスが言われたことがそのとおりであり、確信しているとの意である。終末の時代に住む私たちにとって、この祈りは、ますます私たちのものとなるべきである。

結論

この手紙が書かれた時代、初代教会はネロの迫害に始まる困難な戦いと試練の中にあつた。実際には、迫害に次ぐ迫害を体験する中、彼らにとって、終末とキリストの再臨こそが生ける希望となつたのである。彼らは、新天地で神と御子と共に住むという救いの喜びを待望して、「(アアメン、主イエスよ、きたりませ)」と祈りつつ、試練に耐えた。私たちもそのように応答しよう。

研究資料

(宮澤)

この箇所は、22・6から始まる黙示録の結びの部分であり、特にその中でも頂点といえる箇所である。しかし、この箇所の中に記されている内容は種々様々であり、段落の分け方も注解書によって様々である。今回の段落の取り方もその一例である。メッセーじの備えに当たっては、6節から始まる段落として注意深く読むことが求められる。その上で12節以下の部分をメッセーじ箇所として取り上げる。しかし、まずこの書が教会に語られた書であり、しかも礼拝において語られた書であることを覚えて備えたい。

テキスト

12 見よ、わたしはすぐに来る 7節の繰り返し
の言葉であり、また20節にも同様の言葉が語られている。ここでいう「わたし」とは、16節に明らかにされるように、イエスご自身である。12節からは、イエスご自身が直接語り手として登場する。

13 わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである 黙示録1・8、2・8、21・6と同様の言葉。この言葉にはいくつかの思想が込められている。①キリストの完全性。アルパ（アルファ）はギリシャ語アルファベットの最初の文字、オメガは同じく最後の文字であり、最初から最後まで、すなわち完全という意味である。②キリストの永遠性。時間的な初めから終わりまで、彼の中に時間のすべてが含まれる。③キリストの権威。キリストは初めから終わりまで、すなわち終始一貫し

て権威をもっておいでになったお方である。

14 都に入る この出来る者とそうでない者
とが対照されている。また黙示録では **さいわいである** という言葉が7回用いられており（1・3、14・13、16・15、19・9、20・6、22・7と14）、この箇所を辿（たど）ってみることは有意義であろう。都に入るこの出来る者とは **自分の着物を洗う者たち** のことである。このことは既に黙示録7・14に言及されており、キリストの血によって聖められたすべての聖徒という意味であろう。その結果、彼らは **いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をおって都にはいる** ことがゆるされる。一方15節の罪のリストに抵触する者たちは、天の都に入ることができない。 **大ども** とは、恥を知らない人、野蛮な者、あるいは人に嫌われる存在を指すと考えられる（申命記23・18）。

16 前述したように、ここにおいて12節から始まるカギ括弧（かぎくわ）の部分がイエスによって語られていることが明示されている。これらのこと とは黙示録の内容全般にわたるもので、この手紙は **諸教会のために** 書かれたものであるとはつきり示されている。 **ダビデの若枝** とは黙示録5・5にも登場した言葉で、キリストを指すメシヤ的表現。また **明けの明星** も黙示録2・28に用いられている表現であり、これもキリストを意味する言葉である。明けの明星は、やがて来る朝を予告する。

17 花嫁 とはキリストの教会をさす言葉である。イエスの言葉に対して聖霊も教会も **「きたりませ」と叫ぶのである**。これは「見よ、わたしはすぐに来る」（7、12）というキリストの声に対す

る応答の言葉であり、再臨を待ち望む言葉である。

また **聞く者** とは、この預言の言葉を聞く者とも、また聞く耳のある者（2・7）とも解し得る。しかし、この節は招きの言葉であり、聞いて叫ぶ前に私たちの渴きをいやすことのできるキリストのもとに来て、それを受けなければならぬ。

18 著者ヨハネの警告。旧新約聖書は神の啓示であり、それ自体で完全性を持つ書である。したがって、聖書に何かを付け加えたり、反対に何かを取り除いたりした場合には、それと同様の報復を神ご自身がなさるのである。聖書の言葉に何かを加える者は、この書に書かれている災害を加えられ、反対に聖書から何かを取り除いた者には **その人の受くべき分** が取り除かれる。

20 これらのことをあかしする 明らか
にキリストを指している（1・4、22・16）。しかし、語り手はヨハネである。 **しかし、わたしはすぐに来る。来る** という言葉は現在形が用いられている。来つつあるという意味である。 **しかし** とは、キリストの再臨が真実であることを示す言葉であり、また語り手であるヨハネが教会を代表して **主イエスよ、きたりませ** と答えている。もちろんこれはヨハネだけの言葉ではなく、御霊も花嫁も（17）、そしてこの言葉を聞く私たちすべての者も共通して語るべき言葉である。この言葉はアラム語「マラナ・タ」（1コリ16・22）と同じ表現であり、主の再臨を待ち望む言葉である。この手紙は、終始一貫キリストの再臨を待望する言葉で貫かれている。

参考図書 山口昇『ヨハネの黙示録』新聖書注解新約③（いのちのことは社）、他

聖書

黙示録22・12、21

タイトル

再臨の宣言

暗唱聖句

これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アアメン、主イエスよ、きたりませ。黙示録22・20
 主の宣言に「アアメン、主イエスよ、きたりませ」と応答しよう。

目標

導入

(田上)

今から70年前に、第二次世界大戦という世界中を巻き込む大きな戦争が起りました。その戦争が激しくなるにつれ、死ぬ人がどんどん増えていきました。(※聴き手の状況が許されれば、六百万のユダヤ人が殺されたホロコーストのことを触れてもよいであろう。)

そうした戦争中に、ドイツのある教会の礼拝で説教を語りながら牧師が、うめくようにしてこう祈ったそうです。

「主よ、来てください…」と。

再臨の宣言

このように祈った牧師さんは、その時、何を考えていたのでしょうか。自分らの力では、この戦争を止めることはできない(虐殺を止めることができない)ということを考えていたでしょう。しかし、そのことだけで心が一杯になってしまっていたわけではありませんでした。このとき牧師の心には、イエス様がはっきりと言いついてくださった「しかり、わたしはすぐに来る」というみ言葉

が聴こえていたのです。だからこそ祈ったのです。

「主よ、来てください!」と。

再臨の宣言がもたらす励まし

「わたしはすぐに来る!」。

これは再臨の約束です。イエス様がもう一度、来られることをイエス様が自身が、はっきりと言いついて表されている宣言です。

このイエス様の約束によつて、私たちは励ましを与えられます。そうすると「頭をあげる」ことができるようになるのです。

とても苦しいことや悲しいことがあると、私たちの頭はどうなりますか? 元気がなくなつて、下を向くでしょう。頭だけでなく、心も重くなつて沈み込んでしまうような気持ちになります。頭が下がったままではちゃんと生きていきません。

今、私たちに戦争の苦しみはありません。しかし、皆さんはどうですか、頭が下がつてしまつたということはありませんか? 心が重く沈んでしまつたことはないですか? そういうときに頭を上げることができるようにさせるもの、心を高く上げる強さを与えるのが、「わたしはすぐに来る」というイエス様の再臨の約束なのです。

わたしはすぐに来る!

このことを語られたイエス様の声はどんな調子だったでしょう。そのことを皆さんにも考えてもらえるように一つのお話をします。

ひとりの男が山道を歩いていたときのことです。その道は細く、片側が崖になっていました。しか

も柵とかガードレールはありません。道を歩いていた男は、足を踏み外して崖から落ちてしまひました。しかし、崖の途中に突き出た木に引つかかつて谷底には落ちなくて済んだのです。男は必死になつて木にしがみつきました。しかし、だんだん手が疲れます。「もうだめかもしれない…」という気持ちになつてきた時、男は自分に呼びかけてくる声を聴きました。

「行くまでガンバレよ。すぐ行くぞ!」救助隊の声でした。自分を助けに来てくれる人がいる。その人がこちらにむかつて来てくれている! そのことを知った男の心には、もうだめかもしれない、という気持ちに逆らうように勇気が湧いてきていました。そして力をふりしぼつて木にしがみつきました。この男が聴いた「行くまでガンバレよ。すぐ行くぞ!」という言葉と、イエス様が宣言されている「わたしはすぐに来る」という言葉には、とても似ているところがあります。イエス様は、苦しめても一生懸命に耐えている人のために、こちらにむかつて来てくれているのです。

共に祈ろう

頭が下がつて、「もうだめかも知れない…」という気持ちになつてしまつたとき、「主よ、来てください!」と祈る私たちに、イエスさまは頭を上げ、心を高く上げる勇気を与えてくださるのです。どうぞ、この祈りを覚えてください。そして、祈りましょう。

♪「主よ、来てください!」
 ♪心を高くあげよう♪ (新聖歌50)



聖書 ヨハネ19・28～30 テーマ 救いの完成

序論

(福井)

この箇所はヨハネによる福音書の受難物語の頂点であり、福音書全体の頂点でもある。イエスの死は、救いの成就であり、完成であった。このイエスは死に勝利して復活し、昇天され、再び来られる主である。その再臨の時、神の国(新天地)が完成し(黙示録21・1～4)、贖われた者は栄化の恵みに与り、救いは完成するのである。

一、わたしは、かわく

〈わたしは、かわく〉は十字架上の第五言である。肉体的な苦痛のことで、〈イエスは今や万事が終ったことを知って〉言われたのである。これは十字架第四言の「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ27・46)と密接に関係している。イエスは、十字架上で神から捨てられ、罪の身代わりとなつて、神がご要求になる罪の代価を完全に支払われた。その時、イエスはこれで贖いの一切が終わったと自覚され、ご自分の肉体に灼熱の渴きを感じて、〈わたしは、かわく〉と言われたのである。

地獄の責苦が激しい渴きに代表されることは、舌を冷やすための一滴の水を求めたあの金持に見られる(ルカ16・24)。イエスが十字架の上で渴き苦しめたのは、私たちが永遠の命の水を飲むことができない(ヨハネ4・14)、もはや渴くことがない

者とされるためであった。

〈わたしは、かわく〉の言葉は、主の肉体の苦痛の極限を示されたのである。また聖書を成就させるためでもあった。それは、イエスご自身の言葉の成就と詩篇におけるメシヤ預言の成就である。

二、酸いぶどう酒

ローマの兵士たちが通常飲んでいた酸味のある酒が置かれていた。その時、そこにいた人たち、おそらく兵士が、〈このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した〉。すると、〈イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われた〉。

この出来事は、マタイ27・34でイエスが拒まれた出来事ではなく、マタイ27・48の出来事に相当する。イエスが死の直前に〈わたしは、かわく〉と言われた。その言葉を聞いた兵士たちには、切実な肉体的要求から発せられたものと聞こえ、ぶどう酒を指し出したのである。

ヒソプは過ぎ越しの祭りの儀式に用いられ、小羊の血をヒソプの枝につけ、かもとと門柱に塗ったのである(出エジプト12・21～22)。そしてパプテスマのヨハネがイエスを指して「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1・29)と証言したとおり、イエスはまさに過ぎ越しの小羊として十字架上でほふられた。ヒソプの枝は、預言の成就としてのイエスの渴きと、神の小羊であるイエスの使命の完了の宣言との関係を表している。

三、すべてが終った

イエスは、嘲りと辱めのぶどう酒を飲まれると、〈すべてが終った〉と言われ、息が絶えてしまわれた。これは「完了した」(新改訳)、「なし遂げられた」(新共同訳)という意味である。それゆえ、〈すべてが終った〉とは、「万事休す」という意味ではなく、「完了した」、「完成した」という意味なのである。

それは、父なる神の救いの計画が、これで「完成した」という意味である。私たちが、イエス・キリストを救い主と信じさえすれば救われるように、贖いの道を開いてくださったということである。そして、私たち罪人が受けなければならぬ苦しみの杯を、主はすべて飲みほされ、その苦しみが終わったことを意味するのである。

その後、イエスは「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ23・46)と言われ、〈首をたれて息をひきとられた〉。イエスは神に受け入れられる完全な犠牲となられた。その確証として、贖いのわざを全うするために、ご自身を世に遣わされた方に「頭をたれて、霊をお渡しになった」(新改訳)のである。

結論

イエスは十字架上で苦しみを受けることによって、神と人間との和解のための贖いを「完全」に成し遂げてくださった。その主イエスが、再臨されることで、神の国(新天地)が完成し、栄化の恵みが実現する。この完成の希望に生き、その実現のため、祈り(マタイ6・10)、福音を伝えていく者でありたい(Ⅱテモテ4・1～2)。

研究資料

(宮澤)

この部分はまさにヨハネによる福音書の受難物語の頂点をなす箇所である。いや、福音書全体の頂点といっても過言ではない。罪のない、そして本来死のなわめとは全く関係のないお方である神の子イエスが、死の深みに立ち、まさにそのところで神のわざの完成を告げられるということこそが、罪のゆえに死ぬべき私たちにとつての大きな慰めである。その慰めの頂点がこの箇所である。

この箇所は、大別して①「わたしは、かわく」といわれた主の言葉 ②酔いぶどう酒を受けられたこと ③「すべてが終わった」と言つて息を引き取られた主の死 という3つの場面で語られることが出来る。

テキスト

28 万事が終った 終った(㊦)テレスタイとは、30節の「終った」と同じ言葉であり、イエスの死を神の勝利と理解するヨハネの意図を持った言葉である。イエスの生涯のゴールの到来と、それが勝利であることを示した言葉である。**わたしは、かわく** イエスの十字架の七言の第五言。この言葉が用いられた目的の一つは、主の肉体的な苦しみの真実性と激しさを人々に認めさせると同時に、イエスご自身の言葉の成就(ヨハネ4・34、18・11)をも表す言葉と考えられる。また、この言葉は、詩篇におけるメシヤ預言の成就(殊に22・15、69・21等)とも考えられる。しかし、この節

にある **聖書が全うされる** とは、具体的に聖書のどの箇所を指して語られたものであるのか定かでない。旧約聖書の中の特定のみ言葉を思い描いたのか、それとも数多くのメシヤ預言を総合的に思い描いたものかははっきりしない。

29 酔いぶどう酒 おそらく兵士たちが通常飲んでいた酸味のある酒が置かれていたのであろう。マタイ27・34にある記述は、十字架刑の苦痛を和らげるために犯罪者に与えられる苦みを混ぜたぶどう酒(マルコ15・23によると、没薬を混ぜたぶどう酒)のことで、主はそれを拒否された。しかし、イエスの死の直前の「わたしは、かわく」と言われた言葉は、そばにいた兵士たちには主の肉体的な渇きが大きいものとして映つたのであろう。そこで兵士たちはぶどう酒を差し出した。主はそれを拒まずに受けられたのであろう。**ヒソブ** ヒソブ草茎を束にして、ユダヤ人がきよめの儀式に使用したものである(レビ14・4、民数記19・18、詩篇51・7等参照)。イエスは過ぎ越しの小羊として十字架につけられた。ヒソブは過ぎ越しの儀式において重要な役割をもった(出エジプト12・22)。ヨハネはそのことも思い起こしていたのかも知れない。

30 すべてが終った 「完了した」(新改訳)、「成し遂げられた」(新共同訳)とあるように、**終焉**というよりも、むしろ完成・成就を指す言葉として理解すべきであろう。地上における神の御業を成し遂げるというご自身の使命がここに完成されたとの宣言の言葉である。しかし、この言葉の背後には、様々な意味が含まれていることを理解す

べきである。主は、贖罪のわざの完了の意味を込めてこの言葉を語った。また旧約聖書の預言の成就としての完了を意味した。また父なる神の要求をすべて完全に満たしたという意味における完了をも意味した。そして主は、ご自身の御苦しみが終わったという意味での完了ということも意味した。もちろんこれらの意味はごく一部に過ぎない。しかし、これらの事柄が完了したのは、主を十字架につけた人間の側の意志ではなく、主を地上に送られた父なる神のご意志と、主ご自身の能動的な意志であることを確認したい。**首をたれて息をひきとられた** この言葉も、主ご自身が主体的に、能動的に自ら死の道を歩まれたことを示す表現である。**首をたれて** とは、それまで主の首はまっすぐに立てておられたことを意味する。死の瞬間まで、主はその首をあげておられたのである。また**息(㊦)プニウマ**をひきとられた(㊦)パレードケン) とは、イエスが父なる神に能動的に自らの意志で引き渡されたことが含意されている。「だれかが、わたしからそれ(いのち)を取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである」(ヨハネ10・18)という、主ご自身の言葉の中にそのことがうかがえる。

参考図書 ジョン・C・ライル「ライル福音書講解 ヨハネ④」(聖書図書刊行会)、村瀬俊夫「ヨハネによる福音書」『新聖書注解 新約①』(いのちのことば社) 他

聖書 ヨハネ 19・28～30

タイトル 救いの完成

暗唱聖句
すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。
ヨハネ 19・30
完全に成し遂げられた救いの完成である再臨を待ち望もう。

目 標

導入 (田上)

今朝は、イエス様が十字架にかけられて苦しみを受けられ、息を引き取られるときの様子を聖書から聴きました。十字架にはりつけになったイエス様は、七つの言葉を語られました。その中には、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉がありました。

そして今、私たちが聴いたヨハネによる福音書によると、イエス様は、「すべてが終った」と言われて、息を引き取られたのです。

成し遂げられた贖い

「すべてが終った」ということをイエス様は、「もうこれで終わりだ。わたしは死ぬのだ…」という意味で言われたのではないのです。そうではなくて、「完了した。やるべきことはすべて終わった」という意味で言われたのです。

イエス様は、世の罪を取り除く神の小羊として来てくださいました。そのイエス様は、世の人の

罪を取り除くために十字架にかかれて命をささげられたのです。

そして、本当であるならば、私たちが受けなければならぬ罪のさばきをイエス様がお受けになったのです。その時の苦しみを最もはつきりと伝えている言葉が、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」というイエス様の叫びでした。

このイエス様が十字架で苦しまれたことによつて、私たちは神様からの赦しを与えられ、また神様との仲直り（和解）ができるようになったのです。そのような救いのために必要なことを100パーセント、イエス様が十字架で成し遂げてくださったのです。

さばき主として来られる主は

十字架のさばきをつけられた主

しばらく前から、イエス様の再臨というのことを学んできたでしょう。イエス様がもう一度、来てくださることを再臨と言うのでしたね。

その時に来られるイエス様のことで忘れてはならないことがあります。それはイエス様が「さばき主」として来られるということです。

イエス様は再び来られた時に、すべてのことについて決着をつけてくださるのでしたね。そのためにもイエス様は、正しいことと悪とを、はつきりと判断なさるのです。イエス様の判断、さばきに対しては、だれも言い訳をすることはできないのです。しかも、そのさばきは、イエス様が来られた時に、生きている人だけでなく、もう先に死

んでしまっている人にまで及ぶのです。

そうになると、イエス様が来てくださることは、喜びというよりも、なにか恐ろしいことのように感じられるかもしれません。私たちは、決して、神様を軽く見てはならないのです。

しかし、再臨のイエス様のことでもう一つ、忘れてはならないことがあります。それは、さばき主として来られるイエス様と、十字架にかかれたイエス様とは同じお方であるということです。つまり、別人ではないのです。このことを一瞬でも見失ってはなりません。

さばき主として来られるイエス様は、十字架で「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と祈られたお方です。「すべてが終った…完了した」と、おっしゃってくださったお方なのです。ですから、罪を犯すことを恐れても、イエス様を恐れる必要はないのです。それどころか、イエス様が来てくださることに、よる望みは、非常に大きなものなのです。それは、もはや死ぬことや罪を犯すことのない体に変えられるという望みなのです。

主を待つ姿勢

再臨のイエス様を待つことは、信仰の背骨の一部ともいえます。待つということとは、何もしないで、何となく待つということではありません。イエス様を信じよう、と呼びかけながら待つのです。イエス様を喜び礼拝しながら待つのです。何度でも悔い改めながら待つのです。

♪ひかりひかり♪（こどもさんびか83）



牧羊ひろば



幌向小羊教会学校

はじめに

幌向小羊教会は創立12周年を迎えることができました。創立当初、教会学校は神様の祝福によって大きな存在となり、地域に用いられてきました。青空のもと地域の公園で、教会員の自宅のリビングで、毎日曜日に開かれる日曜学校にたくさんのお子どもたちが集まりました。しかし現在は、地域のお子どもたちの数も大幅に減少し、教会学校としての活動全体を曜日ごとで紹介すると同時に、直面している今後の課題などをまとめてみました。

*毎週日曜日の教会学校活動

〈朝の教会学校〉

毎週日曜日、教会で行われる教会学校に、「地域から連なる子どもたちを！」と祈りつつ、地域に教会学校案内を戸別に配布しています。

そのような祈りと奉仕の中で、現在、教師たちはくるくると変わる教会学校の状況に、教師自身が失望や現状に振り回されないよう、神様に整えていただく必要を感じています。

少し前に、月に一度行われるキッズクラブから次々に教会学校に集う地域のお子どもたちが起こされました。0人から一気に4名弱のお子どもたちが来るようになったのです。それも、子ども自身が教会学校に友だちを誘って来る…という状況でした。ただただ主の御名をあげました。教会学校で何か特別なことをしたわけではありませんでしたが、それが8〜9カ月ほど続いたのです。しかし、学年が上ったり、友人関係が変わったり、家族の日曜日の計画によって、毎週、定期的に集えるお子どもたちが減少しました。いつも変わらず、イエス様のもとに留まるお子どもたちへと導かれますようにと祈りながら待つ、だれも来ない時期もありました。

しかし最近、数名の友だちと一緒に連なってきた内の1名のお子どもが、教会で配られた聖書を片手に聖書のみ言葉を聞きに来るようになったのです。神様のご計画は、私たちには計り知れないと1名のお子どもを通して教えられたのです。ただ、私たちに託された幼い魂のために全力を注いで奉仕する者とされたいと願っております。

〈リトルクラス〉 幼少・小学科

リトルクラスのお子どもたちの家族は教会員です。現在は未就学児と小学低学年のお子どもたちが対象



リトルクラス

で礼拝後の短い時間にも合同で行われます。以前は礼拝後の保護者も加わり、一緒に行っていました。しかし、現在は子どもたちの成長にあわせて子どもたちと教師だけで行っています。牧羊者の紙芝居や手作りのみ言葉カードで、聖書に親しむことを大切にしています。

集まる子どもたちの年齢や理解度はそれぞれなので、グループに分けることも必要かと思いますが、年令が違っても子どもたち自身が互いに励ましあって共に過ごしているため、現在は合同でのクラス進行にしています。

また礼拝では、献金の奉仕に携わっています。そこで神様へ感謝をさげること、神様の御用に携わる喜びを体験的に学んでいます。小さな経験であっても、主に喜ばれることを求める子どもたちとされるように願っています。

〈ティーンズクラス〉 中高・青年科

その名前のとおり、中学生から19歳までが対象で、主に礼拝後に集まります。短い時間の中で、礼拝のメッセージを分かち合っています。礼拝の説教者があらかじめティーンズ用に作成したワークをもとに取り組んでいます。その中でティーンズの方々が、メッセージのどのような部分に心が



キッズクラブ

〈キッズクラブ〉
毎月の第三土曜日、午後にはキッズクラブという集会を持ちます。ここでは主に地域の小学生が集まりやすい集会として開かれています。キッズクラブでは、聖書のお話を聞き、月ごとに違った遊びを



ティーンズクラス

留まったかを分かち合ったりしています。ティーンズクラスの教師陣は青年教師なので、ティーンズにも親しみやすく、学校での出来事や進路のことなど話しやすい雰囲気があることが感謝です。

また、信仰をもっていないミッションスクールの学生たちが加わることもあります。その時だけの関係でなく、今後、教会がどのように関わっていけるか、多感な時期を過ごすティーンズが自分の将来を導く神様に連なっていけるように…という願いと祈りがあります。

＊毎月第三土曜日



キッズクラブ3

しかし、最近では子どもたちからの意見やアイデアをもらうことにしています。その中で、自分たちが遊ぶだけでなく、キッズクラブに協力したいという子どもたちも出てきました。集会のあとに片付けや掃除などを通して「関わり」を持つことができて感謝しています。

＊毎月第三水曜日午後

〈キッズクラブ案内配布〉

二〇〇七年九月までは、キッズクラブへの参加者は非常に少ない状況でした。そんな中で「待つ」



キッズクラブ2

します。簡単な料理や工作、近くの公園で運動会など、体を動かして遊びます。教会学校の青年教師であっても、時には子どもたちのパワーに圧倒されることもあります。しかし、なんとか子どもたちとの関わりを大切にしようとして、子どもを導く教師陣も一生懸命です。さらに子どもたちに助けられることも少なくありません。

毎月、子どもたちの興味を引く遊びを教師たちが考えてきました。



キッズクラブ案内配布

ことができ、校門前で配布することができました。案内配布をするようになり、キッズクラブに集まる子どもたちが多く加えられるようになりました。また、配布の回数を重ねるごとに、毎月校門に立つてチラシを配布する教会員の顔を覚える子どもたちや、自分の名前を覚えて欲しいという子どもたちも現われます。見知らぬ大人が、子どもに気軽に話しかけにくい世の中ですが、この配布の時間には地域の子どもたちと直にコミュニケーションをとることができる楽しく辛いひととき、神様の大きな憐れみと恵みを感じずにはいられません。

＊毎年夏の教会行事

〈ファミリーキャンプ〉

毎年夏に行われるこのキャンプは、子どもと教会学校教師・奉仕者だけで行うものではありません。名前のとおり教会全体が神の家族として互いの交わりを深めつつ、子どもたちも神の家族として共に過ごすものです。施設も予約して貸しき



ファミリーキャンプ

りで使えるようにしているの、遠慮なく、自由に過ごすことができます。

プログラムの内容も大切にしています。同時に、家族関係に難しい問題を抱えている子どもたちもいます。食事も寝泊りも一緒に「ファミリー」キャンプの中で、教会員が主にある父、母、祖父、祖母、兄や姉として関われば幸いです。キャンプそのものの集まりの中で、温かな神様の愛に触れられるように心から願っています。

キャンプには毎年ごとにテーマが定められており、大人も子どもも同じ聖書のメッセージを共有します。その後、大人と子どもそれぞれの時間をもちます。そこでは信仰の分ち合いを深めます。数回しか教会に来たことのない子どもたちを、信仰の決心にまで導くことは難しいことです。それでも教師が個人的に子どもとのカウンセリングを持ち、愛し、受け入れてくださる神様を伝えていきます。日頃のキッズクラブや教会学校に来ることの出来ない子どもたちも参加できる貴重な神のファミリー体験です。

本州に比べ、夏休みの短い北海道（約1カ月）では、たくさんに夏の行事が詰まっています。そのため地域の子どもたちや教会学校内の生徒たちに、教会のファミリーキャンプへの参加を励ますための良い知恵を必要としています。

地域に貼り出すポスターはできるだけデザインを変えないようにして、一目で教会のキャンプと分かるようにしたり、案内を送る時期を考えたり：試行錯誤しています。

〈教会学校教師陣〉



教師会

当教会では教会学校教師は、教会学校だけでなく、教会内の教育部の部員として奉仕しています。奉仕の内容は幅広くあります。教会に連なる子どもたちと、直接教会学校に関わることの少ない教会員との間をつなぐパイ

プとなるようにということも目標にしています。そして教会全体に託されている教会学校の魂のために祈り、労することができるよう願っています。時には、主のために大きな目標に向かって希望を抱く教師会も持ちます。そのなかで色々な課題を発見します。時には起こってくる状況や課題に立ち止まり、気持ちがおれてしまうこともあります。しかし、まず教師陣が先の目標と同時に、自分自身の足をしっかりととした土台に立たせ、足元の一步から忠実に神様に仕えていくことを積み重ねられるようにということが目標です。

教師会ではたとえささやかであっても、「牧羊者」などから教師としてのあり方を学ぶ時間を持ち、自らのためにも祈り、整えられるように願っています。

（飯田勝彦）

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇九年度第IV巻をお届けできますことを感謝します。執筆の方々には、秋の諸行事のあわただしい中を執筆していただき、心から感謝いたします。教師養成講座には、日本ホーリーネス教団東京中央教会牧師の錦織寛先生の「説教：子どもの心をつかむお話し」を掲載させていただきました。これは今年度、兵庫教区CS教師研修会の講演内容の要約です。教会の奉仕の中心である説教について良い学びとなると思います。牧羊ひろばでは、幌向小羊教会のこれまでの歩みと、現在の活動状況を紹介していただきました。

終わりに今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。聖書講解 鎌野善三師 大頭眞一師 水川武志師 福井文彦師

研究資料 中島啓一師 井上義実師 宮澤清志師 メッセージ 小野淳子師 松浦みち子師 和田 治師 田上篤志師

ワーク(A) 吉田美穂師 鎌野 幸師 (B) 野勢かほる師 佐藤直哉師 (C) 小泉 創師 田代美雪師

(D) 竹崎光則師 上森恭子師 杉山俊一師 (中高科) 朝川清英師 石田高保師 小野淳子師

子ども聖書日課 土屋直子師 藤井洋美師 トラッシュカード 長田栄一師 光田隆代師 加藤 清師

校 正 長尾秀紀師 長尾明美師 打ち込み 楠 淳子師 長尾明美師 イラスト 伊中めぐみ師 テープ起し 長尾明美師

また、陰で労してくださった各師と兄弟姉妹、ワーク印刷と発送のベラカ出版、印刷のあくもと菱三印刷に心から感謝いたします。(長尾秀紀)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇九年度 IV巻

二〇〇九年十二月一日発行

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三三一九 電話(〇七八)五七五五一一

FAX(〇七八)五七五五一一

印刷所 菱三印刷株式会社

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み